

Emigre

Flyer

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星の環境は悪化してしまいました。

目次

設定集

未登場かあまり重要でない設定

Another:1

Another:2 | 1

Another:2 | 2

1

2

3

4

5

6

7

8

9

A

B

10

11

12

13

14

15

16

17

1

16

20

22

27

30

32

36

40

45

48

52

56

61

65

70

75

78

82

86

91

95

98

102

1
8



107

設定集

? 一区

区というのは簡潔に言えば人種を表します。人種の判断は目の中の模様で決まり、大元の性格によっても判断される場合があります。1〜7というのは数字が小さいほど裕福という事で、数十年に一度、更新のために会議が行われます。

・1区

前王の死亡を機に革命運動が加速していった。既存の貴族社会を打破するための急進革命派、外郭の貴族を革命運動に引き入れて段階的に貴族を打ち倒す根本革命派の二つが存在する。

ヘイダルの前組織であると推測される1区直属諜報機関「金枝」が存在し、1区側でも貴族社会を覆そうと行動している。

豊かな鉱山資源を持つ地形を独占しており、揺るがぬ地位を確保していた。しかし、ノイズの拡散によって閉鉱されることになり、その生産を落としているため次の総会では1区ではなくなるのかもしれない

区民の特徴として闘争意識が高いが、それを表に出すのは獣らしく良くないとされており、外面は良い。

|| ||

「この地、屍の上に成り立てり。獣、上に立てり」

——古書「地統譚」：「屍上に獣の住居在り」1句目

|| ||

「光を齎す葦となれ。恵みを齎す雨となれ」

——魔王

|| ||

「インテリアに金使ってるにしては質素な生活してるな!」

——ニグロク侯爵

・2区

健康保険機関パーソナリタイムーヴメントや2区信用銀行、研究機関などが発達した区の中でも人間に対して温情な区。ヘイダルが設

立した研究所もここにあり、それなりに巨大なものとなっている。治安が区で一番良く、健康水準も最高である。

しかし、税の徴収や地価の高騰などにより、ある程度の収入がなければ人間らしく生きてはいけないだろう。

収入源は研究貢献費、効率的に生産された食物、月契約費などである。

区民の特徴として消極的であるが、好奇心はどこよりも強く、自分の知らないことは積極的に知ろうとする。平等主義であり、良い意味でも悪い意味でも人を良く考えている。

|| ||

「人の善意で回ってるとしたらなんで税を徴収すんだよ!!!」

——区民男性

|| ||

「全ての人間は健やかに成長し、静かに死ぬために生きるのです。それをサポートするのが我々、2区の組織達です」

——パーソナリティムーヴメント会長

・3区

民間軍事組織ゴドウィンが政策に癒着している建前上は民主政治の区。傭兵を用いての護衛や、暗殺、武力牽制などを行い、時には争いを仲介し、時に争いを始める。

収入源は軍事資源の輸出や安い労働力、高い護衛資金である。5区の外縁警備、1区の身辺警護団、2区の夜間パトロール隊など、広く分布しているが、7区に次いで平均寿命が短く、2区に依存していなければ早死にする。

凶器を手に入れやすい環境にあり、いざこぎは死人を伴うことが多い。それは怠慢ではなく、孤児を引き取ってゴドウィンの傭兵にする政策の一部である。

区民の特徴は正義感にあり、悪を正すと言う姿勢が強い一方、強制をする事が度々あるため危険だとも言える。

|| ||

「我々は3区と共に死ぬ！然し我らは死なぬ！故に、此の地は不滅で

ある!!」

——ゴドウィン1級傭兵

|| ||

「怖いのなら逃げて。逃げたいのなら足を動かして。そつと、背を向けて。静かに、ここを去って」

——Guardian

・4区

消滅した区。最後の4区はユイ・ペデエンスだと言われている。ギヤドペカドルが殺害したことによって事実上絶滅した。区で唯一”調整”が存在しないとされており、血族争いの頂点に立つものが真なる4区であるという考え方故に混血や他区との交流を拒む。

区民は排他的であり、他区や他者との交流を控える傾向にある。

|| ||

「可哀想に。一体どれほどの生贄を刈り取れば天秤が傾くのやら…」

——ユイ・ペデエンス

・5区

「牢獄」や「機械都市」などと揶揄される区。主要都市を一つと、その広い中で郊外、中央に分かれている。郊外は5区が行き届いておらず、たまに行われる”調整”以外で5区が及ぶことは殆どない。そこには左遷された貴族や区民の親族が劣悪な環境で住んでいる。栄養食は他区の5倍安い、人間の食べられるものは15倍ほどの値段である。

隕石は郊外で爆発し、5区はそれを放棄したことで地価が安くなり、2区の研究所が派生しようとしている。

都市部はビルが乱立し、複雑に入り組んだそれは迷路のようである。

収入源は特別認可の利用費や「押し付けられ費」であり、生産量で言えば殆ど無いに等しい。

他区から人が来る場合には特別な許可が必要であり、出る場合には許可がないと逮捕される。

唯一の医療機関が区長の施設である。

区民の特徴として周りの事を良く考える協調性が高い傾向にあり、計画的に物事を進める事ができる一方、能力面で差が強い。

|| ||

「5区は機械の街。人間の機械」

———冒険譚全集第1巻序文

|| ||

「呻き声が聞こえるでしょう。建物の軋む音も。我々という歯車は油もないまま、時を刻んでおります」

———区民女性

・6区

不自然災害から副主要都市が壊滅した数多の飛地を持つ区。性質上物流と宿泊に特化し、収入源もそれらに偏る。性質上政府自体の強制力は弱く、しかし産業の発展は辛いので他区からのスパイの駐屯地として名乗りを挙げるなどなんでもありになりつつある。

7区の争いの原因となつたうえに2区から借りた負債が重くのしかかり、5区や2区への移住を検討する区民が増えた。

区民の特徴として、のどかで友好的である事が挙げられる。ドアのロックは一重で、犯罪を行った犯人に同情的である人間も多い。

|| ||

「別にいいだろ！区の境で大縄やってたつてさ！」

———区民少年

・7区

豊富な自然を持つ技術においていかれた場所。基本的に外縁に存在し、人々は前時代的な家や方法で住んでいる。

命を狙われている人間の逃げ場やリゾート化しようと6区が企んでいたりしているが区の中で一番平和である。

しかし6区の不自然災害によって移住してきた6区の間人が侵略したことによって敵対意識が深まっている。収入源は食物である。

区民は相手を観察する力が強く、集団意識、単独意識共に切り替え

る事が可能な器用な人種。

〓〓〓

「彼処で暮らすのには全てを捨てる必要がある。何故なら、あつたつて意味がないからね」

ローグッドフェローズ

〓〓〓

「静かに暮らすのにはここが最適だと思う。人を壊す争いも時間もない。のどかで、音の響くことができる場所だ」

ローグテストimony

— 重要用語

・ノイズ

月により生じる精神病。さらに、星から聞こえる怪音によつて発症するケースも確認されており、精神病が進行すると月に魅了されていったり、他のことに無頓着になり、さらには根本的治療は不可能かつ既存の精神回復手段も無効。ノイズを発症した人物は非公式ながらノイザーと称される。

実質的な防御手段が少ない故に新月の日以外夜に外出しないことや、防音室を用いるなど対策手段自体が講じられている。

・「シンパシー」「シナジー」

シンパシーは全員が持っている魔法の様な特殊技能のこと。しかし、教育機関で教えられるのはシンパシーの発現方法のみで、実際シンパシーを使わない人間は多数いる。

シナジーはTestimonyが開発した、今では広く用いられる技術であり、シンパシーを機械に付与したり、遠隔で扱うことができるというもの。これによつてシンパシーの需要が高まった。

— 組織

・バベル

所属メンバー：

Secretary、Testimony、アンリ・シエルバー、
clat、Augé

組織元：

5区爆発跡地

組織規模：

少人数（100人程度）

活動目的：

星に存在する不可思議な現象のバックにある何か、主にヘイダルを追跡する。ノイザーの差別されない社会を目指す。

構成員特徴：

「ある部門に特化した人材」が多く、全体的に見ればアンバランスだが人材配置を考え最大効率で運用されている。

戦闘員が少なく、治療に充てる人員も少ない。

秘密組織であるので退職後も守秘義務がある。

・ヘイダル

所属メンバー：

チーフ、グッドフェローズ、モラル、ギャドペカドル

組織元：

2区研究機関

組織規模：

超大規模

活動目的：

世界をあるべき一つの姿に置き換える

構成員特徴：

ノイズに感染していない者のみで構成される。参加している人は老若男女問わずで、支部を多く持つ。

バックには1区の諜報機関「金枝」があると考えられており、その場合は1区が他の区に侵略しているという解釈になる。

・2区パーソナリティーヴメント

組織元：

2区

組織規模：

中規模

活動目的：

他区民も含めた健康と安全を保障する

構成員特徴：

調査チーム、統括チーム、医療チーム、援助チーム、外交チームに分かれ、災害後の救出やデモの鎮圧、護衛など幅広い分野で目的を達成する。

・2区信用銀行

組織元：

2区

組織規模：

大規模

活動目的：

安全な資産運用と貸借。

構成員特徴：

難関な資格と忠誠心テスト、モラル測定や心の余裕の診断、身辺調査を経て入職の許可を貰うエリート集団。そこから導き出される信頼は他区と一線を画す。そもそもここ以外の銀行は銀行の役目を果たしていないのがほとんどだ。

金利は殆ど0に近く、貸し借りには厳正な診断が行われるが、限度額は著しく高い。貸し借りが他区の区長であることもある。

・ゴドウィン

所属メンバー：

Stellvertreter、ジエヘナ

組織元：

3区

組織規模：

超大規模

活動目的：

3区の発展

構成員特徴：

幼少期から傭兵をやっている人間が多い。雇われてから寿命まで一貫して職についている人間が多く、警備、身辺警護、監視員などを

担当する。正義感が強く、またチーム意識が高いためよほど能力が高くなければ他区からスカウトされない。

人を殺めることに対してあまり抵抗を覚えない。

・ 6区非制限組合

組織元：

6区

組織規模：

小規模

活動目的：

身勝手な法に縛られない活動を行なって難民救済や一時保険を行う。

構成員特徴：

入ろうとする気概があれば入ることができるが、6区の間限定である。専門的知識を持っている構成員は限られ、実際に医療現場などに行くときはアシスタントが殆どである。

もし助けてもらったとしても彼らの誘いには乗らないようにしなければならぬ。

一場所

・ Testimonyの研究所

7区に存在する自然に囲まれたドーム型の研究室。Testimonyしか研究者がおらず、植物に関する研究や「シンパシー」の研究を行なっている。

数十年以上前から建物自体は存在するらしく、入ってすぐの促成栽培機や水生植物のためのプール、蔦に覆われた機械などがみられる中央部、一つだけの扉から行ける寝室かつ温室栽培の場所である温室栽培場、プールの奥に在る機械に区分される。

・ 爆発跡地

5区に存在する隕石が空中爆発した場所。広範囲に被害が及び、人が住めない場所になった。しかし、その中心にはバベルが建てられ、環境調査から人体に有害な不可視の物質はないと判断された。

建物の外壁などの物質は飛来し、今も薄い霧を形成しているた

め、吸い込むと気管支系の疾患に罹りやすくなる。

・不自然災害跡地

6区に存在する不自然災害の跡地。不明な物質が蔓延しているとして2区や6区が封鎖し、跡地の都市の住民を移住させ、土地を放棄した。災害の発生した理由が不明なため不自然災害と呼ばれる。

2区が研究したところ、飛来している物質はノイズを引き起こす因子を持つとされている。

― アイテム

・「Emigre」

Secretaryの書いた意味不明な文字で書かれた本の群。

・グッドフェローズ専用のシンパシー増幅薬

グッドフェローズのシンパシーで見れる過去の幅を広くする効果を持つ。中に何が入っているかはわからないが、本人曰く「作り方を間違えたサラダドレッツシングの味」らしい。

・ノイズを誘発させる瓦礫

Guardianが報酬として受け取った全面黒色の箱。中は2区の調査チームが回収した6区の不自然災害によって崩壊した建物の調査用瓦礫が入っていた。

― 歴史

・ 1 4 5 4 / 1 1 / 1 2

6区不自然災害

・ 1 4 5 4 / 0 9 / 0 8

1区前王の死亡

・ 1 4 5 4 / 0 9 / 1 2

魔王の就任

・ 1 4 5 4 / 1 0 / 0 1

1区直属諜報機関「金枝」の設立

・ 1 4 5 4 / 1 0 / 0 4

4区の消滅

・ 1 4 5 5 / 0 3 / 3 0

5区外縁上空にて隕石が爆発

・1455/04/02

バベル設立

・1455/06/22

月が起きる

・1455/07/11

一度目の星から怪音が聞こえるという記録

・1455/07/14

ノイズの第一発症者の確認

・1455/09/12

・1456/01/20

ヘイダルによる5区区長への2区研究所の派生の打診

—キャラクター

・Secretary

出身：1区

身長：181cm

性別：女性

所属：バベル小隊03隊長

人事幹部を務める。常にハードカバーのアイデア帳とペンを持っており、見たものや聞いたものを記録している。

精神病が疑われていた時期があるが、その原因は彼女の本棚を埋める「Emigre」という本である。主に「シユカレ」と呼ばれている。

・アンリ・シエルバー

出身：5区

身長：132cm

性別：女性

所属：バベル小隊03 研究員

行動原理などを研究する生物学者。組織から外を出ることを許されておらず、Secretaryやclatに外の様子を聞いている。

隕石の爆発の直上にいたが奇跡的に助かった。シエルバーというのは彼女のいた地域の名前である。

・ Testimony ^{testimony}

出身：1区

身長：125cm

性別：女性

所属：バベル提携研究員

バベルとは外れた7区の研究所で研究を行なっている謎の研究員。今の技術を形作っている個々の「シンパシー」を機械や遠隔で付与することのできる「シナジー」の技術を確立した。

特別認可の無い時代（十数年以上前）から存在していると主張しているが、容姿は歳をとっていないように見える。

右腕の殆ど全てが焼け焦げている。

バベルにはレーテと名乗っている。

・ ■ ^イ ^ク ^ラ ^{ット} ^ト
clatt

後で書きます

・ ^ア ^ウ ^ゲ
Auge

出身：未公表

身長：162cm

性別：女性

役職：バベル職員

ヘイダル所属のギヤドペカドルと親戚の謎の女性。どのような繋がりやシンパシーを持っているのかは不明。ギヤドペカドルの発言からバベルから逃げようとしている。

右目に眼帯をつけている

・ チーフ

出身：2区

身長：191cm

性別：男性

所属：ヘイダル2区研究施設担当課所属・深度3

5区にヘイダルがバックにある研究所を派生させようと交渉する

3人のチームの長。組織からは異端者扱いされているが、期待も同時にされている。

グッドフェローズと相棒となつてからは性格も大分丸くなり、人と話すくらいには心の余裕ができています。

ノイズに関して人一倍興味を持っており、仲間を重んじる性格からノイズに感染した同志を気遣い、労わる。

・グッドフェローズ

出身：7区

身長：164cm

性別：女性

所属：ヘイダル2区研究施設担当課所属・深度3

6区の不自然災害から流れ込んできた6区の間人間によって引き起こされた戦いに巻き込まれた所を2区に保護され、チーフと相棒として組織に組み込まれた。

グッドフェローズの「シンパシー」は瞬きするまでの間過去を見ることが出来るため、現地調査員として活動している。薬品を用いる事で更に遠い過去を見ることが出来る。

どのような場所でもあつげらんとしている。

・モラル

出身：6区

身長：151cm

性別：男性

所属：ヘイダル2区研究施設担当課所属・深度2

6区の派遣会社からスカウトされた若い研究員。不自然災害による難民の増加によって追い出される前にスカウトされたのだと推測される。

グッドフェローズとチーフとのチームに編入されたが、フェローとは出身地がわかっていてもあまり気にしていない様子だ。チーフにはある意味尊敬の意味を持っている。

・ギヤドペカドル

出身：未公表

身長：177cm

性別：女性

役職：ヘイダル直轄戦闘部隊幹部、深度4

バベル所属のAugeが唯一の親戚であり、ヘイダルにおける忠誠心・戦闘能力共にトップクラスの戦闘員。隠密行動、特に孤立している人間を殺す暗殺をおこなっており、今まででありえないほどの功績を上げている。何故そこまでするかは魔王が関わってきそう、狂信者とも呼ばれている。

最後の4区、ユイ・ペデエンスを殺害した。

右目に眼帯をつけている

・シャルル・デヴオン

出身：1区

身長：177cm

性別：女性

追放されたデヴオン伯爵の一人娘でありノイザー。娘の病気を何処かで知った根本革命派により父が唆され追放されるに至ったが地下室に隠れ無事だった。

近くの6区に避難し、ノイズの都合上かなり古い地元での幽霊邸のような場所に住んでいる。

面倒見が良く、困っている人を見かけたら放っておけないタイプで、自らの資源を削ってでも助ける。

・Guardian

出身：3区

身長：142cm

性別：女性

役職：バベル特殊行動課

殺しを伴わない守護を仕事にする特殊な護衛。人の言うことをすぐに信じる癖があり、それが自らの首を絞めることであってもそれを曲げない。理由は過去で一度だけ失敗した護衛の案件があるが、それが本人の言う通りかどうか分からない。

ノイザーであり、物を液体化させたり粘性を操るシンパシーを持

っ。

「ロイエ」と呼ばれている

・ジエヘナ

出身：3区

身長：188cm

性別：男性

役職：元3区ゴドウィン名誉將軍

すでに退役した軍人であり、5区の区長に気に入られている。しかしゴドウィンから離れているわけではなく、寧ろ組織側が離してくれていないらしい。

・Stellvertreter (サティリヴァートレー)

出身：3区

性別：女性

役職：3区ゴドウィン2級傭兵

ジエヘナに押し付けられた難儀な性格の女子。シンパシーにより、一般的に発動中は彼女を知覚できる人間はいない。親を無差別テロに巻き込まれ亡くした挙句に左上腕中部から下が義手となっている。

シンパシーは「自分の状況を相手に強制する」ものであり、瞬間的なものを押し付けることはできない。

・ペルセフォネ

出身：1区

性別：女性

役職：1区区長

「魔王」と称される革命、貴族社会打倒派の1454/09/12に区長に着任した前王の娘姉妹の妹。「ヘイダル」の前組織となる1区直属諜報機関「金枝」を設立し、1455/09/12にをしたが、本人含め世界の誰もそれがなされたことを知らない。

前王の教えをなぞる反面、自身の姉であるエリスに対してはどこか軽視しているように見える。

エリスとは12歳差の関係で、腕を焼いてしまったことを今でも悔

いている。

・ピユラー

小さい黒猫で、廃屋を偶然見つけ、そこでテミスを発見したと言っている。毒舌で、自分がテミスより上だと思っている。

・テミス

身長：147cm

廃屋に住んでいると言う謎の少女。そこに来る前までの記憶は欠如している。ピユラーによって名付けられ、共に生活を行う。

なぜか猫であるピユラーの声を聞くことができ、彼女はそれを不思議とも思っていない。

— Q & A

Q. なぜチーフたちのチームが異端者扱いされているの？

A. 通常、ヘイダルはノイズに感染した構成員を見捨てる姿勢を取りますが、チーフを初めとした一部の構成員はノイザーに対しても同志と言い、庇ったため異端者に位置付けられました。

更に、ノイザーを見捨てる思考に疑念を抱かせないために組織側が彼らを異端者と称し、それが間違っている行為だと知らせる為でもあります。

|| || ||

Q. なぜバベルは爆発跡地に建設されたの？

A. 一番最新の土地の広い放棄された場所であり、5区が調査をしないと行った故に、迂闊に他区が調査することは出来ないため、簡単に見つけられないと思っただからです。

|| || ||

Q. 4区は何故滅んだの？

A. 原因は不明ですが、「自然的なものではない」とユイ・ペデエンヌは言っています。それ以外で言えば、

- ・混血を嫌うため人口をあまり増やせなかった
- ・殺害された

があると考えられます。

未登場かあまり重要でない設定

—カロス・デミア

出身：2区

身長：187cm

性別：女性

所属：2区調整担当直属組織「スタシイス」構成員兼3区1級榮譽傭兵

ゴドウィンに所属している他区の人間の中で特に優秀であり、表彰さえされた優秀な2区の間人。調整においても失敗を残さず、更に傭兵の仕事をこなしている。

シンパシーは「選択した音の音源を知れる」という物である。

ジェハナの將軍時代に交流を持ち、彼の経営する酒場によく遊びにくるが、酒に強い故か癖は良くなく、暴れ回ることがしばしばある。

彼女の最大の武器は地雷に始まる携帯型設置武器の応用能力とその戦闘技能である。

—シルヴェット・ノズワシー

出身：4区

身長：164cm

性別：男性

所属：4区藝術規格「傑作」、「思考」基礎確立者

緻密・無感情な建築様式「巧匠」が4区を取り巻いている中、思考の具現と評された「思考」が突如出現し、それより評価された芸術を構築した獄中死した芸術家。自分の芸術の特別認可を取り下げ、25歳の時に呼吸器官系の故障により死亡した。14歳の時に投獄されたという事は親族が存在しないということであり、死亡後調べたところ、「巧匠」の立役者の曾孫であることがわかった。

彼のしたことは見立て上復讐であり、彼の残した最後の作品「シルヴェット」は自画像ではなく、彼を匿ってくれた少女の彫刻であった。

—アン・チェム・ファーム

出身：6区

性別：男性

所属：現代学教授

1区から7区を全体的に調査しており、人脈はかなり広い。「アン・チエム・フアームの判断試料」を開発しており、これは6区の宿舍などに全体的に配置されている。

教授としては教える姿勢に問題はないものの、しょうもない譬え話が多く、変な笑いのツボでなければ人気が出ることは無いだろう。

一ケフェイド

出身：4区

身長：162cm

性別：男性

所属：4区秘密遡及員

シンパシーは「心臓を食べた時、記憶の一部を手に入れる」ものであり、使用期間が30〜50日のスパンの内5日間で、彼自身、積極的にシンパシーを用いようとは思わない。主に、孤独者の遡及を担当しており、それがロゴス家周辺のことになってから「秘密」となった。

食べれば食べるほど記憶を持ち、また思い出の中での感情も同時に蜂起する。食べて仕舞えば良いので、全て食べたあと吐き出すなどしても構わない。

一組織戦争について

1区と2区により、多数の組織、傘下組織が特に忙しくなる時期が重なることを俗に組織戦争という。この時期となると新たな製品や生活保障などが出てくるため組織に期待する人間も多く、融資を送つてどちらかにかける人間も多数存在する。

1区は機械製品や電線の製造、2区は薬品や生活安定案による更なる資金集め。つまりは組織にとつての戦争とはいいい刺激でありプラスであるので、上層部ではわざと無理難題を言い渡す時期を合わせていると噂されている。

一シンパシー不正利用疑惑、訴求権利贈与について

主に3区、5区における問題であり、個人のシンパシーをその人や家族に伝えず、無断で商業利用する手口が横行していると疑われている問題で、源律の「個人はけして害せず、害されない環境を区は作らなくてはならない」の部分に違反するとされ、2区は区律に条件付きで個人のシンパシーが組織に使われていないのかという訴求権利を贈与する旨を追加すべきだと告げている。

—シンパシーの原理解明のための組織、「オムニバス」について
「オムニバス」は2区に本社を設ける「ヘイダル」から分裂して再度蜂起した独立組織であり、シンパシーを解明するために研究を行なっていた。病死した人間から血を提供してもらい、それを蒸発させた際に未知の結晶が出現。過去に見つけられなかったのは目視またはレンズ越しにしか確認できていなかったからだと思われ、その用途について詳しく調べられている。

—エリスの飲んでいるお茶について
研究所にて栽培しているミントで作られており、清涼な香りと飲みやすさからエリスはただ単なる紅茶より気に入っているという。ミント茶はペルセフォネも自室でよく飲んではいるが、世間にはマイナーすぎて全く浸透していない。

—エリスの研究
「崩壊」後、エリスはオムニバスに移動し、研究を共にすることを決めた。立場上組織内には存在が公表されるものの、3区の傭兵を雇い、守られながら研究を続けている。

「シナジー」を開発したと言えどシンパシーは謎が残っているため、現地チームと協力をしているという。

—4区の建築様式について
都市区画はシルヴェット・ノズワシーによる「思考」が、アプス・バシリカの「巧匠」を取り巻いており、郊外では、セルセによる「アルカイック」が根付いている。

元々が芸術であったものを建築に応用し、建築を芸術として見做すのが4区の常套手段で、その変換をすることが良いこととも思っている。

一 遡及員とは

4区は血族を重んじるものであり、現区長のロゴス家から始まり、法律からも血縁を離すことができなくなっている。その中で遡及員とは、孤独のまま死亡した人間、つまりはこれより代が続かなかつた場合と、本人が望んだ場合に限り、その人間の系統を辿り、記録する役割を持つ。

遡及員は4区直轄であり、他区に同じような組織は見受けられない。

一 調整とは

4区以外に存在するそれは、政治、組織上都合の悪い人間を暗殺することを指す。それは他区の間人であることや重役であることも多い。しかしそれは源律並びに区律においても合法とは言えないが、調整用の組織は大抵直轄であるので、合法のように錯覚される。

A n o t h e r : 1

「いへっー」

痛みがゆつくりとやってくる。目を開けて、体を反対にして天井を見た。雨漏りの水滴が目間に当たる。そして左端に見えるのは黒猫の顔だった。

「…もしかして、キミが落とされたの？」

ベッドの上から見下すような猫の視線。その猫は言った。

「いい気味じゃねえか」

床に打ち付けられた鼻をさすりながら起き上がった。パキパキと床が鳴り、黒猫が入り込んだのであろう入り口が見えた。

ベッドに目をやる。ベッドのようなもの、だと思うけど。黒猫は予想以上に小さくて、ゆったりとした目でこちらを見つめていた。私は言う。

「キミ、意外と小さいんだね」

「うるせえ」

吐き捨てるように猫は言う。立ち上がって、また雨上がりの水滴が頭に当たった。

「お前、なんでこんなところにいんだよ」

黒猫は聞いてきた。ただ、私にもわからない。しばらく考えて、ここに来るより前のことも考えてみたけど、そっくりそのまま抜け落ちたかのように無くなっていった。

「記憶がねえのか。まあこんな廃墟に似合う人間なんて屍だろうしお前みたいな奴は流れ込んできたただけだろ」

「確かにここは雨漏りがひどいね。ただ、優しい場所だよ」

猫は首を傾げた。私はベッドに座って黒猫を持つと、膝の上に乗せた。舌打ちをされたものの極度に嫌がったりはしなかった。

「逆にキミはどうして来たのさ」

「…こんな場所にこんなものがあるなんて知らなかったからだ」

私は周囲を見る。腐った木材でできた廃屋。雨上がりの太陽が差し込んできて、すこし幻想的な家。多分、私に似合う家。

「お前の名前はなんだ」

「私…？うん…」

素っ頓狂なその質問に私は頭を悩ませた。この猫、さつきは私が記憶喪失かということに納得してなかったっけ？

「そうか。オレが名付ける」

「ついでにキミの名前も教えてよ？」

口から出かかった言葉を黒猫は飲み込んだ。私の名前は安易に決められるのに自分の名前はダメってことなのかな。だとしたら随分と自分勝手だけど。

「お前の名前はテミスでいいだろ。オレはく…ピュラーでいいわ」

「…変な名前ね」

クスツと笑った。黒猫…ピュラーは拗ねたのか私から離れ、窓枠に飛び乗った。

「いいかテミス。おめえはオレより頭が悪いし子供っぽい。だからオレの言うことを聞け」

「えくなんで？キミ猫で私人間じゃん」

黒猫はため息をつくようにした。

「オレがちよつと体当てただけでベッドから落ちるようなやつがオレより強えかよ。あんま冗談言うな？」

あまり反論もできないので不貞腐れてもう一度寝転ぶ。ピュラーはジャンプすると、お腹の上に着地した。

「ふげっ！」

「お前はどうかやって生きて来たんだ？食いもんもなければここは不潔だし、飲み物なんてこの雨ぐらいしかないだろ。山に登ったまま行方不明になったとしても慣れすぎてやがる」

汚れたワンピースがそれを物語っている。結局記憶がないのだから答えもないようなものだけど。

「まく生きてるならそれでいいんじゃない。私はそれでいいと思うの。ピュラーもそうでしょ？」

「…まあ、な」

私は過去を振り返る。だけど、何もなかったかもしれない。

Herzは極夜の組織、つまりは隠密行動に特化した組織の壊滅の為2区の辺境に侵入した。彼女の他に人員はいない。躊躇なく扉を破壊すると同時にサイレンが鳴った。

彼女は音を聞く。しかし何も聞こえなかった。組織の核はもっと深い場所にあるのか、既にもぬけの殻なのか。

「5区の建築様式に酷似している…。ルートを覚えておくとしよう」
彼女はサイレンの鳴る中を歩くものの、本当に何も反応はない。数分後、無線の音が聞こえる。

「ギャドペカドルだ。いけるか？」

「… 私に本当に身を預けてよろしいのですか？もしよろしければあの子と戦いましょう」

組織の長と何処かの傭兵の会話か？音はかなり下、いやよくもここまで掘削できたものだ。

「ああ、我々は問題ない。どうせ、近く探りが入るだろうと考えていた頃なんだ。君がいなければ既に諦めていた命だ」

「あら、嬉しいことを言ってくださるのね。気に入っちゃうわあ。じゃあ、行つてきますね」

通信は切られそれ以上聞こえない。ギャドペカドルは十字路で立ち止まった。銃に手をかけている。

瞬間、建物の”流動”が奥からやってくるのを見た。波… なのか？

「敵襲… それも奇襲を取る敵か」

ギャドペカドルは一度十字路から退き、波を避けようとするが、波は伝播して道に來たので、その間を潜る様に彼女は回避した。

「そうだあ、気に入ったついでに言っておくわね。私のシンパシー、あなた達にも届くかもしれないわよお」

通信が、今度はさつきより近いところで聞こえる。その音声の返答はない。

「あら？もう伸びちゃったのかしら」

「3区の傭兵にこんな奴がいるとは聞いたことがない…。調整員か、未登録の軍人か」

小声で呟くHerzとは対照的にこの奇襲女は大っぴらに、普通に話すのだからより一層狂気を感じる。

もう一度、今度はさつきよりも大きな波がギヤドペカドルの背後から出現する。ザザザザといった建材の擦れる音が背筋を強ばらせる。組織構造のわかっていない彼女にとってこの波がどう作用するのかよく理解はできていない。

「少し加減はできないものなのか！レヴィアタン…。」

「ああ生きてらしたのねえよかったわあ。けどごめんさいねえ、あなたとあの子は砂岩と鋼鉄くらい硬度が違うもの。私だって全力を出さないと死んでしまうのよお？私が死ぬほど頑張ってるんだからあなたも死ぬほど耐えなきゃいけないのよ？」

無線が復活したのか。レヴィアタンという名前らしいが、やはり聞いたこともない。酷い言い分だが、まあわからないこともない理屈だ。

「その調整員の場所が分かればそこに集中させればいいんじゃないのか?!」

「あ、そうねえ。それも考えたのだけど、建物が壊れそうだったからやめていたのよねえ。そうして欲しいならそう言ってくればよかったのにい」

その瞬間、大きく建物が揺れる。正しくは大きく波打ってきた。彼女はシンパシーを通じてではなく、波の中から声を聞いた。

『レイリー・コラプス』

Herzの周りで波と波がさんざ独立し、反響し、ぶつかり合い、角を抉り取った。それは波を打ち、微生物のように移動しながら彼女を追う。

彼女は剣を抜くと、刀身でそれを受け止める。が、建材の重みか、自然の脅威か、それも次第に押されていく。ジリジリと剣をずらし、波の衝突を回避したと思えば、後ろから衝撃が走った。また別の角がギヤドペカドルの背後を突いた。床に手を付き、伏しているとその波

の強さがわかる。度々それはぶつかる最も大きな波となり、また分かれていく。

(如何なるシンパシーであつとしても此処迄の規模は基本起こせない…… シナジーが在ったとしても使用者の意と異なる挙動を起こす。ここまで統率が取れた攻撃は並大抵の奴であれど起こすことは叶わない)

Herzは声を出さずに考えていた。波の中から聞こえてきた趣味の悪い笑い声が彼女をイラつかせていた。

「ギャドペカドル…… いい名前ですねえ…… 罪人を導くという意味でしたっけねえ…… 私は罪人ではないのだけど裁かれるのかしら？」

声の位置が波のせいであまりよくわからない。波を打っているとしても物質の硬度はそのままのようだ。ギャドペカドルは立ち上がると、床を切りつけ、階を下った。波の終着点が新たに生まれ、すぐにその切り口は爛れた後、然るべき場所は流動し、脱落した。

「私はレヴィアタンっていうの。この研究施設に呼ばれてねえ。ああ、この子達は魔術とかを研究してたらしいわよ？けど集まりから追放されちゃったみたいで、なんか可哀想でねえ、手伝っていてあげていたのよお」

「その様な話が今重要だと思ふのか、レヴィアタン」

高らかな笑い声が続いた。ギャドペカドルの頬に何かが触れたが、それは水だった。

「大切なことよお？あなたみたいなの 私達」の話題に上がる人間なんて重宝する他ないでしょ？殺しちやっても別に文句は言われないだろうけどねえ」

背後の水はギャドペカドルが認識するには透明すぎた。気づいた頃には通路を埋めるような水の中心に彼女がいた。

「レヴィアタンって聞いたことなあい？無いなら無いで助かるのだけどね」

彼女は趣味の悪い女の言うことを無視し、天井に酸素を補給する空間がないことがわかると、水の流れに逆らい、通路を進む。

すると十字路に紺色と黒色の心臓のようなものがある。躊躇なく

それを剣で突き刺すと、そこから生まれていた波が止まった。と同時に、彼女の首に何か粘性のものが巻きつけられると同時に体の自由が奪われる。波がないことによって水は順調に他に流れ、息を吸う。

「…チツ」

彼女が見上げると、そこにはギヤドペカドルより身長の高い女性がいた。それこそが波を生み出していた元凶だと直感で察知すると銃を持ち出そうとするが、右手が思う様に動かない。

「やつと逢えたわあ、綺麗な目をしているのねえ」

「……」

ギヤドペカドルは沈黙を貫いた。レヴィアタンはその強情さにまともな笑みが溢れた。そのレヴィアタンの笑いというのは、何かを軽蔑するような意味もあり、美しいものを見た時の純粋な感動という意味もある。要するに気味が悪い。

「この施設には研究者の子たちが21、別の組織の子が3いたけど、もう死んじやつてるかもねえ。あなたに向ける波はこの施設全体の波だから、まあ死んじやつても誰も文句は言えないのよお？」

声は聞こえない。無線や、ここ周辺の通信全てが途絶している。

「あまり長居するのは良くないわよお？白い肌が青白くなって海に還るのもまた感動しちゃうけどね」

「お前はあまりにも危険すぎる」

ギヤドペカドルがそう言い放つとレヴィアタンは自分のことではないように高らかに笑った。まるでそう言われるのが生きがいと言われているように彼女を感じた。

「いいわねえ… 私らしいこと言ってくれて感動で泣いちゃうかもしれないわあ。私の心臓を一つ壊せたんだし、ヒントでも見せておこうかしら」

レヴィアタンはギヤドペカドルの剣を抜くと、その輝きをしばらく堪能した。そしてそれを首に当てるが、何の傷も入らない。

「あら？もしかして祈りを忘れたのかしらあ？粗雑になってしまったのねえ」

そう訳のわからないことを言うと、レヴィアタンは剣を鞘に丁寧に

収め、自分の手を頭にし、心臓部に手を入れる。その手は獣のようで、5指あるものの爪は尖り、青かった。血も出ず、ただ人間としての体裁を保つだけの人形なんじゃないかとギヤドペカドルは思った。

自分の拘束が解けている。そう気付いたギヤドペカドルは右手の塞がっている今のうちを考え、剣をレヴィアタンの首に突き刺す。今度は刃が通った。

「あらあ、手間が省けてよかったわあ」

仰向けに倒れたそれはご満悦にそう言った。通常であれば既に声は出せずに死んでいる中、それはまだ喋り続けた。

「念の為、ここはよく調べておいた方がいいわよお？私のことは言ってもいいけど、熱心な神話好きには言わないほうがいいかもねえ」

そう言うと、満面の笑みでそれは活動を停止した。Herzは心臓を落ち着かせ、あらためてそれが活動を停止していることを確認したのちに組織の点検に入った。

既に、波によって振り回されていて、何も得るものはなかった様に思える。予備電力が尽きたのか電気が全て消え、ギヤドペカドルは撤退することにした。極夜組織でここまで手強かったものはいないだろうとも思った。

戦闘した際にできた穴を見つけ、そこをよじ登った。階下から顔だけ出した時、足音がないまま何かが目目の前の十字路を通り過ぎていった。爬虫類の様な尻尾もついている。登り終わり、周囲を確認してみてもその人型はないが、水だけが残っていた。

レヴィアタンは暖炉の側の椅子に座り、永遠に滴る水を乾かしていた。彼女自身、それを疎いと思つたことは少ないが、家具などの性質上、傷めるのを早くするだけならと仕方なくしていた。

彼女が机に広げる分厚い本は軋む音を立てながら開かれた。神書、3区にて最も読まれている本にして、この星で最も複雑な本だ。彼女の存在はそんな神書の中での異端の書、航海士の日誌から再現された「偽りヴィア書」内で言及される。成り行きが成り行きであるが故に神書に相応しくなく、結局本家に編入はされなかった。次第にそれは忘れ去られていき、ついに覚えていたのはマニアだけとなった。

「もうこんなにも時間は過ぎてしまったのねえ。なんか感慨深いわあ」

そうレヴィアタンは言った。天使から揺り落とされ、つまりは腐れ縁でしか既に旧友には会えなくなっているが、彼女はその中で人間の美しさを見出した。

1人の人間が彼女の姿を見つけた。レヴィアタンは人に取り憑くことが出来たものの、上から見ている身にとつてそれは疎まれた。自分が動くことよつて転覆した船の声を聞いた。波に乗つて大声が響き、木材の割れる音、何かが潰される音が聞こえた。

「船長！こんなところで転覆するんじゃないや俺らあもう…」

「諦めるな。諦めたものから死んでいく。海の渦に飲まれて消えるんだ！」

最終的に1人となった乗組員は、深い海の底に黒く、時折反射する何かを見た。それに気づきあたりを見回すと、そこらじゅうがそんな様子だった。彼の中に浮かんだ海の大蛇の伝承…彼は死ぬと思つていたのだろう。

レヴィアタンは自分の声を使った。これ以上動けばこの男もろとも飲み込んでしまう。海の中から声を響かせる。

「人の子よ。生きたくば片腕を上げよ。死にたくばこちらに来い」

海の声、意志のある声だと、今際の際に聞こえる幻聴だと、自分の望んでいた勇氣付ける声だと。彼は自分の右腕を上げた。寒さによってあざれ始め、じきに動かなくなるその右腕を高らかに上げた。

この海蛇は波を操ることが出来たから、この男の乗った転覆船を比較的安全な場所へ送ってやった。

『海に潜む大蛇は神の御創り賜われた世界の内、5日目のものであり、混沌の海を沈め我らに恵みを与える存在だ』なんて。おかしくて笑っちゃいそうになるわねえ。ふふ。どれだけ嬉しかったのか手に取るようにわかるわあ」

彼女は神書にて空白と著された5日目の項目にその紙を継いだ。それを確認すると趣味悪く笑顔を浮かべ、立ち上がる。絨毯の上を歩くたびに水が浸透し、奥部でカビが繁殖を始めた。時期に毛は藻類のようになり、壁には植物が侵食する。掃除のしない彼女であるからそれは安易に予想ができる。

まだ空白の棚の前に立つと、その神書を入れる。そういえば、と、彼女はただの紙の束を取り出し、一枚目を見つめた。

それはその船員の病床での記録だった。表題の下には以下のように書かれている。

” 僕の、海に捧げた数十年 ”

その時のレヴィアタンは船員の妻の墓に臥せたその遺体に取り憑いて、自分の姿とした。初めて地に足をつけただとか、そういう感動を噛み締めながら彼の家に向かう。少し借りるだけで、その妻の姿というのは跡形もない、さらには行ってきて初めて気付いたが、彼の目は塩によって殆ど見えなくなっていた。

「随分と久しぶりですわねえ、乗組員さん」

そういうと彼は目を開けた。右腕を上げようとしたが、激痛ですぐに諦めた。額には汗が浮かび始める。

「あら？今は海にはいないのよお〜？」

彼女は咄嗟に優しい声でそう言うが、彼はあの頃の若さを思い出していた。あの頃の必死さと無謀さを。彼女は布に冷水を浸透させて、額に乗せた。そして左手を取る。骨張っている。

細い目はレヴィアタンを見ると、驚いた様な安心したような、彼女の感じていた彼の早い心臓の鼓動も正常まで落ちた。

「元気にしていたかしらあ？あの時はごめんなさいねえ」

彼女はそういった。彼は何かを言おうとはしているが、何も言えなかった。咳が部屋中に響く。いくら人間でないとはいえども、彼女自身人間については良く理解していた。彼が救えない状況にあることや、救ってはいけないことを考えれば、彼女のできることといえれば傍観だった。

彼はわずかに動く左手で机の上を指差した。湿った彼女の手に取った紙の束こそ、彼の人生だった。その中身を知った怪物は彼の目をよく見て、彼女の元いた場所についての話をし始めた。ベッドを僅かに波を用いて揺らし、ゆりかごの様にしながら。彼の目は段々と閉じ、レヴィアタンは彼の弱まる鼓動を聴き、最後、止まった時、言った。

「ゆっくり、おやすみなさいねえ」

彼女は彼の遺体を抱きかかえると彼女の帰った場所に持つていった。閑散とした港町、潮の匂いがレヴィアタンにとつては心地よかったが、それが抱える未曾有の闇を愛するのは彼女だけだった。

取り憑くのをやめ、夫妻は同じ場所に帰った。本当は海に還したかったが、一緒でないと言うのはなんとも不憫な様だった。

紙の束は簡単に言えば夢物語だった。もしあであれば、もしこうであったとしたら。しかしそんなより良い選択をしているにもかかわらず、彼は現実を認め、今より少し良いと言うことを書いていた。

また、紙の束を棚に戻した。彼女は椅子に戻ると、漸く沸騰した水をカップに注ぎ、紅茶を味わった。沸騰したままの熱が彼女を浸透する。それに従って体温も上がった。

彼女はどうかやっても人間になれないことを理解している。外面がこれでも心臓がなくても生きれるし、食べ物がなくとも生きれる。ありえない蛇の尻尾さえついているのだ。人間でない彼女は人間にちよつかいを出してみたかった。それは何をしても何も起きないであろう諦観からの好奇心があったからだ。

「おや。本当にいるみたいですね」

彼女、Secretaryは危険区域の侵入者情報は誤報が多い為、今回確認に赴いたものの最早このシステムなど信用してはいなかった。只、今回は本当に居た事で、少しは信頼性が増したようだ。「にしても、変わらないですね。この霧に、月と、侵入者。不快な音、瓦礫の山」

彼女は誰に言うでもなく呟いた。見上げれば小さい様にも大きい様にも見える曖昧な生物が宙に浮いている。灰色の霧は人間の作ったものだ。懐からメモとペンを取り出すと「朧月と何かを探す人」と彼女は書いた。

暫く彼女は少し高い場所にある瓦礫に隠れ、様子を窺っていた。と言うより、空を見ていたかった。こんな、数年前には見ることの出来ない今では普通の景色。これだけ曇りの日が続けば人の精神は確かに病むのかもしれない。

彼女は瓦礫から身を乗り出し、声をかけた。

「何をしておりますの？」

侵入者の男はおおおと頭を上げた。手には何かが握られている。巡回員がそれを見逃すはずもなく、瓦礫の山を降りながら重ねて質問をした。

「ここが侵入禁止だと言うことは書いておいたはずですね。何故入ってしまったのかしら？」

男は数歩後退りし、呼吸を荒くした。通常であれば、男性と女性。力と言えば強いのはどちらかは明白であったが男の感じていた感情が不利に働いた。

恐怖と焦燥。自分のしたことは些細なことだと心の中で言い聞かせているが、それ以上の思考には至らない。

やがて男と彼女の距離は数mとなり、彼女は再度質問した。灰色の霧は何故か今だけは晴れている。

「何をしにきたのかしら？それとも、私達に何か伝言でも？」

男は答えない。Secretaryは左手を額に当て、大きくため息を吐くと懐から小型の銃を取り出した。組織から提供された、消音小反動を兼ね備えた特殊弾限定の拳銃。男はそれを見ると踵を返し、凸凹な地面を走り始めた。彼女はこうなると分かっていた。牽制のために一発関係のない所に撃つ。男の動きは止まらない。

今度はよく狙い、男の二の腕付近に当たるよう狙いを定めていると、男は何かに躓いたかして転んだ。そこから動かないが、警戒の為拳銃を構えたまま彼女は近づく。

気を失っているようで、彼女は男の手に握られた何かを見る。それは一つの、手に収まるサイズの人形だった。彼女は馬鹿馬鹿しさを感じたのか男の行き過ぎた何かを思う気持ちに呆れたか、溜息を吐いた。一応、病に罹っているか確認したが、特有の傷も無く、男の頭に消毒と止血を施し後は回収係に任せる事とした。

「いましたわ。ええ、人形を取りに来たみたいですよ。本当に居ましたのよ？ええ、あとは任せますわ」

電話を掛けた彼女は話を終えた。不快な音は天使がラツパを吹いている様な音で、彼女を不快にさせる。月が彼女を照らすが、既に思い描いていた純粹なものでないと思うと嫌悪を抱いた。ここはあまりにも知っていた世界と違いすぎる。何時かこの2つの気味の悪いものが彼女を病にしようと思えると人は元から何も変わっていないなかつたと言うことだろう。

隕石の残したこの瓦礫ばかりの土地が彼女の第二の故郷となり得るのだろうか。元5区の都市であり早々に責任ごと破棄された危険区域。彼女は歩き出した。月に見守られながら。

バベルという組織に彼女は所属していた。隕石の遺した瓦礫の山の上に立つ施設であり、今の世界に反抗する人の集まりである。故に、少数派の集合だ。月明かりに照らされ、灰色のコンクリートの霧は肺を侵しながらそれを反射、もしくは取り込んでいる。

警報を解いたSectoraryは自室に戻り武器のメンテナンスを行おうと思っていた。

…メンテナンスといってもそれを鑑賞して思いに耽るだけだが。自室にカードキーを差し込むと、ランプは緑色に点灯し開扉する。人工のものだけでできた部屋。外からの干渉を一切受けず頑丈で意地っ張りな壁だ。

机の前の椅子に座り、左を見て、壁に接している棚の中にある本を無意味ながら見てみようと思った。

「既に失われたものか、私の妄想かと。言っておりましたわ」

彼女はある場面を思い返していた。「何を書いてあるのかわからない」として、小隊03のメンバーの1人である文学に詳しい研究者に相談したが、その研究者すらお手上げ状態だったもの。彼女はカウンセリングを勧められ、受診した。

異常なし。その言葉は本来安心すべき文言の筈だが、そうは捉えられなかったらしい。

「人格乖離、妄想癖…散々な言われ様でしたが、紛れもなくこれは妄想でも何でもなく、事実だと思えますの」

ハードカバーのその本を取り、表紙を撫で、彼女は部屋の隅に向かって言った。そこには知らされていない監視カメラがある。

発音のできないそれは「Emigré」と書かれている。彼女はページを捲った。

Secteryの書き方でつらつらと並べられた度々空白や段落が用いられるその記号たちはページを埋め尽くしている。一度本から顔を上げ、同タイトルで埋め尽くされている棚を見た。自分の書いたものだと思えざるを得ないが、自分が病気なのではないかと言

う不安が湧き上がるのみである。

「これが私か」と彼女は心の中で思った。「身に覚えのないものをここまで違和感なく生活していたのは流石におかしい」と批判があった。それは同感だ。

ノックの音がして、反射的にそちら側を見る。視線をあまり動かさずに本を棚に入れた。

「誰ですか?」

彼女は呼びかけた。扉の外から見知った声が聞こえた。

「私だよ! アンリ・シエルバー!」

早足で扉に駆け寄り、解錠する。自動の開扉を待たずにアンリは部屋に飛び込んできた。入ってくるなりベッドに座る。

「もう夜は遅いのですよ? もうてつきり寝てしまったものかと思っていきましたわ」

「仲間がもしかしたらって時に寝れる訳ないじゃん? まあシユカレのことだし大丈夫だとは思ってたけどさ」

彼女の口からは溜息が出た。公認していない呼び方で呼ばれるのは未だ慣れるもので無いが、自身から名乗った名が何と読むのかわからない故のしよがなさは絶妙に噛み合わない。どこかで軋轢が生まれていた。

「あなたは何をしに来たのかしら。私にはもう語れるお話は残っていないと何度も言ったわよ?」

ベッドに座るアンリの隣に座り、Secretaryはそう言った。

「外のことを話してくれるだけで私は十分なの! ねえ、今回の巡回はどうだった?」

覗き込むようにそう言うので、睡眠時間が擦り減る感覚を覚えながら、丁寧に巡回員は説明した。

「侵入者感知: : あの信頼するに値しない装置が反応したので現場に急行しましたら、本当に侵入者がいました。男性で、何かを探している様でしたから、探し終わったら声をかけ、できれば穏便に済ませたかったのですがやはりそうはいかないのでしょうか。一言も発さず、

私が麻醉銃を取り出した直後に走り出し、瓦礫に躓いて気絶してしまつたの」

アンリは興味深そうに話を聞いていた。表情を「呆れ」と「羨望」に占められている。「そりや、誰でも麻醉銃を取り出されたら逃げるでしょうよ」という言葉を飲み下した。常識という分野を未履修という訳では無い。

「最低限処置を施して回収班に任せましたわ。あの人は…古い人形を手に持っていましたわ。多分、その場所が彼の家では無いかと今になつて思います。とても、探している姿は真剣でしたから」

静かに話を聞いていた生物学者は「不思議だね」と言い、彼女の注意を引いてから話した。

「人やコンクリートすら蒸発するほどの被害だつたのになんで人形が残つてるの？」

Secretaryは一度頷いてから言った。

「…ああ、確かにそうですね。しかし、あの方は元から人形を持つていて、弔いのために置きに来たとも考え辛いのですよ。やはり探しに来たのでしょうか…」

灰色の瓦礫達は全ての人の痕跡を消し去っているはずが、今回それが見つかつたことによつて揺らぎ始めていた。しかし5区が人形の所持を許すだろうか。都市の裏路地に捨てられたものか、見つからずに隠し通してきたか、どれも考えていたものの無意味に見える。

「5区にそんな習慣ある訳ないじゃんシユカレ。他の5区出身の人達つて大体エンジニア部か精神病棟に入つてるよ？有名な作家の本にも書いてあつたし！」

そもそも5区は経済都市であり、輸入に依存していた都市だ。独自の法だとか何とか言つて区全体で決められた最低限の人間への尊厳を遠回しに捻じ曲げる様なものを満場一致で可決させるような区だ。そこに隕石が来たのは不幸としか思えないが、「報いだ」とも思わない。先代から受け継がれて来た非科学的技術を否定し、それこそ機械のように働くことを望むか、罰として機械として働いてもらうために左遷される各区の人材の廃棄所。

『5区は機械の街。人間の機械。』でしょう？もしかしたら職を移された人の家族からも知れませんか。ここを知っている私から言うと、人形などの布製品なんて見たこともなかったですから。」

Secteryはアンリの頭を撫で、優しく言った。

「ここまでにしましょう、アンリ。早く眠った方がいいわ。そうしないと幽霊があなたを連れ去ってしまうかもしれないわよ」

アンリは時計を見ると立ち上がり、早足で部屋を出、それを彼女は手を振って見送った。

数秒、ベッドに座ったままだったが徐に立ち上がると、疑問が再燃する。

「本当に、どうして人形が残っていたのかしら…。」

非科学的が現実的と言う意味を表す訳ではない。物体自体を強化することや他のものと肩代わりさせるという代物がない訳ではないが、そんな人形を守って何かがあると言うのか。もしくは死者の心残りか、最後の執念か。

街中で光の様なものでお手玉をする道化師や、裏路地でゴミ箱を叩き割るホームレスや、物理法則に反して物体を引き寄せる学生。使い方は多種多様だが方向性は決められる。

もしかしたら、記憶すら改竄したり、常識を壊すようなものもあるかもしれない。月が意地悪く拗ねる場所だ。あつてもおかしくない。

部屋の中を何回か周り、ベッドに横たわった。疲れが一気に押し寄せてくる。「後に考えてしまおう」という思考が頭を巡ると、意識は落ちていった。

「隕石は多大な影響を及ぼしましたねえ… チーフ」

「やれやれ」と、資料を持つ彼の手は呆れを示す。その紙の資料はほとんどがダミーではあるがそれを解いた先にある情報とは、彼と鍵を渡された者、鍵を作る者のみが知ることとなる。法律上この程度の文書は各所に提示しないといけないからだ。

「お前はそれを言っただけだ。まあ、分からなくはない。あれから時代は変わった。それまでの世界はあそこで死んだのだ」

「その理屈で言えばこの星は何度も滅んでいますよ、チーフ。詳しくは鍵を渡した後になりますけど、私たちはどうやらハマしたそうですよ」

チーフは彼を見下すように一瞥した。その視線に気づいておきながら見返さないのは彼がそれなりに扱いを心得ているからだ。彼らの歩く廊下の天井、その両端はレールが繋がりに、箱が擦れる音を立てながら渡る。大柄なそのチーフはそれを見てから言った。

「ノイズに現在感染している同志は既に1万人を超えている。死に至った者は23万人。ここに限らず星の住人は月と音に4割は精神を病んでいるだろうと推測されている。あるものは鼓膜を破り、あるものは目を突き、あるものは何かに鬱憤を押し付けた」

「単純な犯罪率の上昇。ノイザーの治療に一般的な抗不安カウンセリングは効果なし。上から提供された聖水とやらも効果はありませんでしたね。全く…」

彼はため息をついた。彼ならびに彼の上司の受け持つ場所はおそらく非現実的な思考を持っているだろう。聖水を口に含めば万病が治癒され、活力の源となることは誰もが言っている。「能力が高いから」「脱退されると困るから」という事から彼らは首の皮一枚でこの好待遇を弄んでいる。

「月の発する精神の異常を引き起こす何かも研究途上。発生源不明の音が何故病ませる原因となるのかも未だわかっていない」

チーフが動きを止めたので、彼も釣られて動きを止めた。大柄なそ

の男は後ろを振り返って、レールを歩き来する箱を見ながら呟いた。「本当に私たちの相手するべきはこの病なのか？」

2人は無言を貫いた。対面から歩く人間は彼らの胸についたバツジを見て畏れるだろう。彼らこそ世界の救世主の組織、その深度3なのだから。

彼は扉を開け、チーフが少し屈みながらその入り口を潜った。中は自然光に見せかけた照明を用いており、長机の先には白の手袋をつけた老人が座っていた。

「ようこそ。どうぞ座ってください。チーフ」

誘導されるがままに、老人の秘書の引いた椅子に座る。この中では一番若いであろう彼が資料のコピーを秘書に渡した。

「再度伺いを立てて下さる機会を得られ、誠に恐縮でございます。区長」

チーフは頭を下げた。その区長は快活に笑い、資料を受け取った。「つきましては、2区での我々の同志の研究。月や音に蝕まれる病気、ノイズに関してお聞きしたいのです。これから研究の拡大の為5区での建設を推し進めるか、現状維持とし、新たな研究者を雇用するか。もし建設を行う場合、区長、貴方のお力を貸して頂けないか」

区長はその話を聞きながら資料をパラパラと捲った。簡潔に言っ
てしまえば「伝染元は実験からハッキリとはしないが、数年前が初の
症例である事から大方月と音が原因だ。更にそれを治す手段が今の
ところ見つかっていない」と言うこと。老人は少し唸り、言った。

「君は、どつちがいいのだね」

チーフはこの半ば放棄の質問を待っていた。高らかに、されど静かに宣言をする。

「私が思うに、ノイズは最優先すべき根絶対象です。それはこの星全体の命題であり、全区民がそれを望んでいる事でしょう。5区の間
であれば我々は効率を優先し、確実な成果を上げることが可能です」

若い男はその不適な笑みを浮かべ発言する男を不安そうに見ていた。一応、作戦通りであったのだからいいのだが、今の発言と、道中の発言は食い違っている様に思える。

区長が熟考している隙に、台本を彼は読んだ。

「我々の組織の技術を持ってしても完全な防御措置は出来ず、少なくとも見積もってこの星の住民約4割は月に掌握されているでしょう」

チーフが言葉を加えた。

「もしも我々がこの病を根絶できた場合、場所を提供した2区、5区には多大なる注目が集まる事でしょう。今よりも発展し、効率の上がつた都市を想像出来ませんか。区長、貴方様は場所を提供する。ただそれだけなのですよ」

その時、秘書が彼に耳打ちした。区長は立ち上がり、杖を持ってこ
う答えた。

「私は君たちを歓迎することはできる。病の克服、何と素晴らしいことか。その心意気は称賛するに値する。では、君達はこの星の救世主、と言うわけだ」

老人と秘書はチーフと若き研究員の元へゆっくりと歩み寄ってくる。彼は資料を纏めて手の内に収めた。

「さて、君達は私と、土地の提供者に何ができる？金か、地位か？いや、そんなものはもうどうでも良い。誰もが欲しくなくなった空白の席だ。私の求めるものは、そう。責任の委託だ。もし君たちがしくじったとしても5区は無視をし続ける。しくじった出来事に対しとやかく言われたとしたら、5区は君たちの周囲の土地だけを2区だと主張しよう。それでいいな？」

杖で、姿勢を維持するチーフの肩を2回弱く叩く、そして区長は踵を返した。区長室に戻る扉が秘書によつて開けられた後、振り返つて、救世主2人に声をかける。

「…もし、病を取り除いたとして、君たちには本当の病には気付かんだろう。そもそも君たちは5区の協力を得たいのは半分、この近くにある何かを目的としているのだろうか？」

さつきと同じように笑い飛ばすと、区長は部屋に入つて行き、秘書は2人に礼を一つして去つていった。

残された2人。研究員が上司を見ると、その両手は硬く握られていた。

「さ… さつさと行きましようね。仕事が山積みですから」

救世主は部屋から逃げるように去っていった。残されたチーフもすぐに立ち上がり、

「分かっている」

とだけ言い、彼の後を追った。

Secretaryはあの領域から出た。指定された車に揺られ3時間が経とうとしている。流れる景色は最初の1時間は何も変わらなかったが途端に田舎道となったり、小家の集合となったり、彼女は不安だったり興味深かったりとしていた。

運転者はさつきから一言も喋らないが、彼女は5区から出たと言うのはよく分かる。彼女は一言だけで済ませた。

「1区だけには行かないでくださいまし」

彼女がここにいるのは上司の通達を受けたからだ。要約して仕舞えば「研究者の資料を受け取りに行ってくれ。後それと適当に話をしろ」

小隊03隊長は別に好きに戦いたい訳ではない。隊長が皆そういうタチという訳でもないが。

車が止まった事に気付き、彼女は目を開けた。植物とガラスでできたドーム…。？これが研究施設だろうか。ドアが2回閉まる音が周りに響く。それらが反響するあたり、5区や1区とは大違いだ。残りの2, 3, 6, 7区だとしてもここまでの環境は限られる。

彼女が見惚れている間にドライバーは植物に塗れたインターホンを押し、大声で言った。

「生きとるか！連れてきちまったぞ！」

1分間沈黙が続いたが、植物が急に破裂した。いや、扉が蹴破られた。

「早くない？いや、ありがとう」

頭を掻きながら、白衣をラフに着た人間が中から出てきた。右手を腰に当て、思ったより小柄で右腕が焦げているかのように黒い。この人が目的の人間なのだろうと彼女は思い、歩み寄る。彼女は、その少女が自分と同じ出身地だと気づいてしまった。それは多分この少女も同じだろう。

「私はレーテだ。取り敢えず中に入れ」

誘導されるがままに彼女は中に入った。レーテは運転手に手を振

り、運転手は浅く礼をして、車に戻っていった。

ドームの中はとところどころに実験用機材が散乱し、一部の紙は純粋な水に飲み込まれている。鳥の囀りやケトルの沸く音が聞こえてくる。レーテは慣れた足取りで席に座ると、Secretaryもそれに続いた。

謎の液体の入った歪んだ形の容器。遅い足取りで机にたどり着いた頃には少女は二つのコップを持っており、一つを彼女に差し出した。小さい緑の葉が3枚浮かんでいる。

「…レーテさん。私は貴女の研究資料を取りに来たのですが…」

「いいんだよ。どうせその依頼の中には『話をして来るように』も付け加えてあるんだろう?」

Secretaryはその的を射た発言を受け黙り込んだ。で、あるならと、彼女は世間話を広げる。

「最近のバベルの活動は停滞しつつあります。各区の抑制か、行動制限などで…特に3区は出入りなどを禁止しているようですわ」

レーテはため息をつき、机の上にある一部の書類を掃った。紙の落ちる音、ガラスの割れる音がした。液体が何かをしているのか落ちた紙は焼失する。

「シユカレ…私はそんな話をしたくて君を呼んだんじゃない。君は確か、精神病の疑いをかけられていたらしいね。結局なんの異常もなく、周りからの蔑視で事は片付いたみたいだが…」

「貴女、よく人に失礼って言われないかしら」

Secretaryは棘の効いた言葉を言うも彼女は怯みもしなかった。

「謎の言語。私はそのサンプルの一部をもらっている。幾つかの出典不明の文献、特に数年以上前の私達の人事ファイルは君の無い病も解消される一手となり得た」

レーテは茶びた紙を取り出し、万年筆で乱暴に何かを書いた。

「私のコードネームは元はレーテなどではない。これだ」

そこには「Testimony」と書かれている。続いてTestimonyは何かを取り出し、仰ぎ、それを紙の隣に置く。

崩れた文字で同じ単語が描かれていた。その筆跡は Secretary のものであり、彼女はそれが精神鑑定に赴いた際の証拠だと気付いた。

「この記号を踏まえてみれば似ていると思わないか？私、もしくはこの星全ての人間はこの記号群を認知できさえしない。その原因もわからないままだ。私も不思議に思っていたんだよ。君だって疑いのかけられたままじゃ窮屈でしょ？」

「……貴女みたいな人にこう言われるのであればまだ精神病と言われたほうがマシでしたわ」

諦めたように Secretary は言った。

「貴女、研究者と言ってもバベルの施設にはいませんし、仕事をしていると言ってもこんな環境は……何者ですの？」

その質問にしばし悩んだが、少女は答えた。

「二つの功績に継るとするならシナジীর利用方法を確立した研究者だよ。バベルに所属しているとは言っても私は何故か付け回されているから本施設には居られないんだ」

「シナジীর？」

Secretary は聞き返した。Testimony は立ち上がると、焦げた金網の上にある灰色の液体の入ったビーカーを取り上げ、彼女の前でそれを揺らして見せた。液体は乖離し、透明な層とより一層暗い灰色の層に分別された。

「君も知っているかとは思いますが私達は魔法のようなものを習う。それを昇華させたものはまだ自分の周りでしか扱えない。機械などの物体、遠隔操作でそれを付与できる技術を私は確立し、その術と別称であるものとして『シナジীর』と名付けた。君達の施設にも、1区の防御セキュリティ、2区の研究施設群、5区の機械ビル、様々な所に使われている」

「バベルにも……しかも3区にまで使われていますの？ということとは、特別認可は取っていないのかしら？」

Secretary の言う特別認可は十数年以上前から存在するある発明品に対して技術の漏洩の対策を施し、知識の入り口を開発者

からのみとする各区共通の法だ。レーテは灰色の液を元と同じ場所でない観葉植物の隣に置くと言った。

「そんなものこの技術が確立した頃にはなかったよ。まだ区と区の境界や目の中による差別化も進んでいなかったからね」

レーテはため息をした。バインダーの間に挟まった紙の束を取り出すとそれをSecretaryに渡す。彼女がそれを確認すると、まさにそれが目的の一つだった。

「君はこの世界をどう思う。アバウトで構わないが、同じく1区の出身として…」

「その話は止めてください。レーテさん」

少女の言葉を遮るように彼女は言った。その声は今まで発した何よりも冷たい。レーテも、それ以上話題に関して追求することはなかったが、お茶を一度啜ると、提案をした。

「このラボを見て回るかい？あの運転手以外ここには殆ど人も来ないからさ。一般人の目から私のラボがどう映るか聞いてみたいんだ」

Secretaryは拒絶を示した。レーテは面白くなさそうに席に座った。

「結局、貴女もそんな人間なら私はもう何もしませんわ」

「…そう。すまなかつたねえ」

背もたれに身を預け、Testimonyは言った。

「この星も今は区という曖昧な境界の中だ。区と言っても種族の集まりというか、そのタチの集まりというか。今ではただ単なる貧富の階層を階級付しているだけという定義すらも忘れられ、目の中で決まるものという認識すら今は薄れてしまっている。このままでは好き放題やる組織や区も出てくるだろうし、既にいるものだと思っている。いくら私達がこうして良くしようとしても従来の価値観や新生の線引きが邪魔をする。」

言葉というのにも信用すらできない。本当に今使っている言葉が我々にとって元から馴染みのある言語だったのか？認識の改竄というのも技術があれば時間やコストこそかかれど不可能ではない。

君達はせめて全能に近づいた気にならない方がいい。一歩ずつ着

実に真実に近づいていくべきだ」

Secretaryは黙って聴き続け、そのセリフの途切れた瞬間踵を返した。

入口に差し掛かった時、彼女の後ろから声が聞こえた。さっきのレーテとは全く違う背中をなぞるような声。

「君達は与えられた物に満足するべきだ」

バベルの職員は振り返ったが、既にあの机に少女はいない。まるで元から人なんて住んでいなかったかのようにこの建物は呼吸を続けていた。

「おめえさん。何やらかした？」

運転手が声をかけたが、彼女は言葉を返さなかった。ドアの閉じる音が一つ反響する。

「レーテを怒らせちゃあかんからな… 本当に」

運転手は身震いした。まるで今もその怒りの禍根にいるかのよう

アンリ・シエルバーはこのバベルから外に出ることを許されていない。何故なら……というのを彼女は知らないのだ。自分の知らないところで、自分の承認していないところで勝手に人生を決められたところというのは不運と思うしかない。

彼女は机に伏していた。透明なビー玉を人差し指で弄んでいる。暇な時間は少ないが、もし暇で無かったとしてもどこことなくこの生活に嫌気を覚えていた。

彼女は過去を思い出していた。この組織に入る前と、入った後とを明確に分けながら。手すりすらない鉄製の建物のある渡り橋を歩き、アラートを気にもかけずはしやぎ回っていたあの日。友達は確かに居なかったが、5区ではそれは気にならなくても良いことだった。

「ここら辺つてずっとこんな感じなの？」

父親の袖を引つ張り、彼女は言った。中身のあるかわからないその父は返事をする。

「わからない。ただきつと、ここの外には素晴らしい世界が広がっているはずなんだ。そう思えるなら、そう思っていた方がいい」

アンリは深く頷いた。あの日のアラートは今ままで一番重大なものであったが両親は不思議に思う彼女に何も説明はしなかった。

彼女が寝ると言つて、自分の部屋に入った直後に両親のため息が聞こえた。若さ故の好奇心か耳を澄ませた。今までは上の階からドンドンと、隣からは大声が聞こえてきたが、その時は何も聞こえなかった。嫌に静まり返っている。

あの時の会話の内容は今アンリは覚えてさえいなかったが、気がついたら、風が身を巡った。寒さで目が覚める。

「おい、大丈夫か!?おーい!救助だ!!早く来い!」

目を開けると、切羽詰まった青年の顔が見える。服はボロボロで手は傷だらけ。すぐに別の人が来たが、同じような状況だった。視界の端には石が……顔の奥には薄暗い空が見えた。

突如、体に痛みが走る。何かが足に刺さっている。

「じつとしていてくれ」

言われた通り動かなかった。瓦礫や木のどかさされる音、足に空気が通った。目にゴミが入る。

「よし、持ち上げるからな…。」

青年はアンリを抱え救助した。彼女は閉じた目を開けた。

自分の発言を思い出していた。

「人やコンクリートさえ溶かされる温度だったのに」

… そう思えば自分もイレギュラーな状態であった。それをシユカレ… よりにもよってチャフみたいなめっちゃバカな奴よりよっぽど考える人間に言ってしまったからちよつと調べたら変な事だと分かってしまう。まあ、それもそれでいいか。

周りには何も無かった。本当に。鉄骨が辺りに飛び出し、コンクリートに混じって人骨があるような景色。巻き上がった粉によって息がしづらい。雲はずっと薄くかかっている様子で終わりが見えない。何があったのかはその時は全く分からなかった。

「あああーここから出れたらなあ」

アンリは上体を起こし、伸びをしてからそう言った。バベルという組織に入りたくて入ったわけじゃない… とも言い切れない。親がどうなったのかも知らず、自分が今後どうするかも知らず、ただ手を差し伸べてくれた青年について行くだけが唯一できることだった。

隕石は5区のスラム… いや、集合住宅地を中心に破壊した。被害者は数えられていない。多分、会社の欠員人数から推察したのだろう。死者を弔うこと、労わめることは既に殆どの区が忘れてしまっている。

アンリは明るい話題を考えた。明日のご飯は何にしようとか、チャフからどんな話が聞けるのかとか。

彼女のラストネーム、シエルバーはアンリの住んでいた地域の指している。働く父母とは離れ、シエルバーは同じような境遇の子と遊んでいたかった。

アンリは椅子から立ち、壁に掛けた地図を見た。バベルのある場所

に丸が付けられた隕石の爆発する前の5区。その丸のすぐ隣には同じように、小さく丸があり、そこには崩した文字で「Here」と書かれていた。元々の彼女の家の場所だ。Secretaryの筆跡のようにも見える。

「これ、なんだろう」

学者はそれを初めて見たかのような反応をした。自分の家の場所などもう覚えていないし、ましてやこんな意味不明な記号の羅列も解るわけがないのだ。そこを彼女はなぞり、ただまだ解らなかつた。

彼女は組織、バベルに縛られていると思っっているが、そうではないのかもしれない。自分がもしかしたら頼んだのかもしれないし、親が頼んだのかもしれない。

それか、自分の死に場所に自分で行きたくないと拒んだのか。

Was the Moon Alive?

High-ranking nobles who have completed migration are obliged to reuse the latest technology to report the lunar situation in detail to the royal family. That's why the monthly report, released under the General Document Publishing Obligation, has generated a lot of interest. Margquis Evorte, an upper class noble, said that the moon "can't go outside, but it's very quiet", and furthermore, "I've hired a satellite explorer to conduct a field survey. Please wait for the next report." was commenting. However, a royal employee who was assigned to the document that were supposed to be disclosed today was attacked by someone, and a large amount of papers were scattered in the district several hours later. It reads in large letters, "The moon was alive."

The culprit was the messenger of the Count Miwoshi, who controls the suburban area, and the clerk

ing invited him to join the royal family. Now just waiting for the next one.

|||||

言語適応中……

権限を確認……

照合中「——————」 未応答

認可されました。一時的にレベルが付与されます。

言語を解読可能なものに変換しました。使用終了時はログアウト処理を自ら行なってください。

提供：1区諜報機関「金枝」開発のシナジーを用いた「前世界」「シナジー」の提供に感謝します。

|||||

月は生物だった？

移住を完了した上流貴族は最新技術を使用して月の状況を明細に王室へ届けることを義務付けられている。そのため、一般文書開示義務で公開された月のレポートは多くの関心を寄せている。上流貴族、エヴォールテ侯爵は月を「外には出れないがとても静かである」と語り、更には「探索家を雇っているので今実地調査を行ってもらっている。次報を待つてほしい」とコメントしていた。

しかし、今日開示されるはずだった文書を運んでいた王室職員が何者かに襲撃され、数時間後に大量の紙が区内にばら撒かれた。そこには大きな文字で「月は生きていた」と書かれていた。

犯人は郊外地域を統制していたミウオシ伯爵の使いで、王はミウオシ伯爵に王室への招待を行った。今は次を待つのみである。

最近情報は情報が混濁しているために頭の回る日々だ。今回のこの騒動は皆が真実だと信じている。ミウオシ伯爵は父の知り合いであったから恐らく此方にも監視の目が光るだろう。

今は1455年6月22日。多分きつと月に移住した上流貴族達

はてんやわんやしていることだろう。月が生き物だという根拠はミウオシ伯爵の使いが持っているはずだからそれを吐けば更なる混乱が招かれる。

前王が亡くなってからあと2ヶ月もすれば1年が経過する。代わった王が直面した状況は下克上と人ならざるもの同士の争いに塗れた貴族社会だった。王は諜報機関を設立したとだけ伝え、貴族を統率するためにスパイを貴族同士のパーティなどに忍び込ませ、不法行為を行なっているものを貧富問わず摘発した。その中で特に罪の重い4人の上流貴族と2人の下流貴族は王が自ら処刑を行った。その様子は新聞にも取り上げられた。

王による処刑

王は座に就いてから1ヶ月の間に諜報機関を立ち上げ、それから3ヶ月間貴族同士のパーティや内部機関にスパイを侵入させ、不法なことを行なっていないか調査したという。近頃の1区は混沌に塗れ、また前王が亡くなったことに対するショックも相当なものであったから1区の機能自体が衰退して行っていた。そこに鞭を打ったのが先日の王による処刑である。処刑は上流貴族であるウォン侯爵とグレートモルドル侯爵と他二名。下流貴族のパックヘル伯爵に行なわれた。

引き継ぎ式以来姿を民に見せなかつた王だが、処刑時には白の服を着、処刑に集まった民を一瞥した。暗殺の可能性もあるため、ボディガードが付けられたが結局最後まで暴動を起こす者はいなかった。王は処刑人の剣を持つと、その剣は輝きを増した様に見える。侯爵達の前に立ち、次のように話す。

「お前達は1区に多大な貢献をしてくれたのだろう。多大な援助を我々に与えてくれたのだろう。バックヘル伯爵は4つのパンを裏路地に住む3人の家族にそれぞれ分け与え、ウォン侯爵、あなたは私に1区の歴史書を下さった。グレートモルドル侯爵は冷夏の際、自らの食事を削ってまで家来とその家族に貧しい思いをさせないように尽力した。しかしそれらの功績を持ってしても相殺などできない罪はこの星に多数存在する。」

父は私にこのような言葉を口癖のように言っていた。一度は聞いたことがあるだろう。『光を齎す葦となれ』。今日、お前達を臣民の前で処刑することとなったのは歴史的伝統である。父のその言葉を心に刻み、己の罪を悔いてほしい」

処刑は直ぐに終わり、解散となった。去りゆく民衆の中では「魔王だ… 平然と人を殺す魔王だ。まだ若々しい、私の娘と歳は幾つ離れているんだ。2か、3か？」と聞こえてきた。当新聞社では毎月、王の支持率をインタビューしている。下記の日時にアンケートを行うので是非来てほしい。

写真には剣を持った王が映されていた。どこを見ているかわからない目だが、信念を持った行動をしているあたりどうあつてほしいか分からない。

新聞を机に置いた。小さな葉が浮いたお茶を啜り、机の上に乗せた組まれた足を解く。カップをポットの近くに置き、薬草を採取するために道を歩く。鳥の声は1区では聞こえない。代わりに人の声は7区では聞こえない。薬草はやや色が濁っている。此方は摘み取るだけで使いはしない。

植物の水槽の水は濁っていないから虫に食われたか。そろそろ夏だな。

何も起きなければいいが、大体、1区の革命運動は終わらないだろうし、月が起きたことでのような影響があるかどうかも分からない。水に葉を入れ、沸かす。口から出る蒸気の匂いはリラックスさせてくれる。

魔王… 魔王か。面白い。確かにそうかもしれない。アイツはそういう性格だからな。

一般文書掲示板、区役所本部前には多数の人……仕事で分類すれば広報のみの人間が屯していた。1人を除いて。彼らは5区の掲示板にしては乱雑に中央に貼られた文書を時間をかけて1枚1枚撮影し、プリントアウトしていた。グループで来ていた新聞社職員はこれについて協議し、1人で来ていた区と区を繋ぐスパイはその文書が引き起こす影響と損害を計算していた。

その、広報の仕事をしていない1人はただ真剣に文書を見つめ、チーフが残したコードを読み取っている。

「2区の研究所が5区にも進出してくるのか？」

「ああ、爆発跡地付近は地価が安いしな。最近ではスラムの形成も聞いちやいるが……今回みたいに研究所が作られるとなると、また扱いも変わってくるんじゃないかな」

様々な声が聞こえる。彼女はそれを遮断しているわけではなかった。並行して謎を解いているだけ。十数分して、彼女はその場を離れた。裏ポケットから取り出したメモ帳にペンを用いて要点を整理する。

「……オーケー。また一仕事があるのね」

帽子を目深に被り、機械の真核部を脱する。彼女はこの雰囲気が好きだった。公開された文書を熱心に見ている人なんて外郭には存在しないし、怪しまれないために致し方ないことだった。

「チーフは何やってんだか……曇天に覆われても太陽は煌々と照っているのに、闇にばかり目を向けて……それも仕方ないか。一介の伝手として言わせて貰えば、もう少し給料を上げて欲しいけどね！」

彼女は路面電車に乗車すると、2区宛の手紙を書き始めた。このまま自分は爆発跡地を出入りする人物の後をつける事、地下に侵入し、パイプラインを見定めておくこと、スパイが組織内にいるかどうかチェックをすると言うことを記した。2区には手紙の中身までチェックをする、それは組織間であれば対象外。「職権濫用は気にしないでいい」彼女の頭の枷を外す言葉だった。

それに、手紙の内容が盗み見られる筈もない。乗車している彼女の他の数名は皆下を向いているからだ。上を向くはずがないのだ。

電車の乗客は段々と減っていき、外郭に着く頃には彼女1人になっていた。車掌に切符を渡す時、彼女は聞いた。

「ここら辺に食事できる場所ってある？ 栄養食を出す店以外で」

車掌は答えた。

「もう少し先に進めばな。侵入者として獄中でパンぐらいは食えるだろうよ」

こりや一本取られた。彼女はケラケラと笑う。車掌は化け物でも見るような目で彼女を凝視した。それまで同じような質問は数えきれないほどされてきたし、そのアドバイスをして捕まった歯車は多い。車掌にとっては彼女の存在自体が信じられていなかった。

「まあ、自分で何とかするよ。ありがとうね」

路面電車は反対方向に進み始めた。終着駅だと言うことを示すそれは5区の半ば見捨てられた部分、集合住宅街だ。

彼女はそのうちの一つ、半分地下に埋まっている箱型住宅の扉をノックした。返答はない。もう一回ノックをしたが、またも反応はない。

「あらっ？」

彼女はポケットから一つの粉薬の袋を取り出すと、そのまま口に流し込んだ。そのまま目を閉じ、少し経つと、彼女の目は開いた。しかしその目は現在の周辺を見ているわけでは無かった。

「こりや… やられちゃってるね」

見えたのは武装した人間が扉を開錠させ撲殺する光景。後からその人間が鍵をかけていることから区の”調整”であることが窺えた。

彼女はもう一度目を閉じ、開けた。目薬を数滴垂らし、扉と向き合う。視界の端に映る瓦礫が不自然な形に積み上がっているのを見て、彼女は気がついた。瓦礫を退けると鍵が埋もれている。正規品ではない。素材が違うからだ。

「オーケー同志。故郷に反駁してまで遺してくれた鍵、有り難く使わせてもらうよ」

彼女はそう囁き、開錠した。

あるべき死体はそこになかった。しかし拭いきれない血痕はそこかしこに散見できる。書類は全部抜き取られ、通信用の機器は壊されていた。元々その通信機器は趣味で取り寄せられた彼の父のものだった。怪しきは罰せよ。抵抗しなければこうなることはなかったと彼らは言い訳するだろう。

「何も得られそうに無い気がするなあ……チーフのやることリストが減るのはいいことだけどここまで情報が吸い取られちゃつてると慎重になっちゃうね」

「5区は気づいている」チーフはそう伝えてきた。その原因に多分の調整があるのだろうが、それが伝わるには最低限1日はかかる。

彼女は入り口にある瓦礫で簡易ながら墓の体を作り、メモを一枚剥がし、屍人の名前を書いて貼った。

「……責任は果たさないとだからね」

爆発跡地はここからは比較的近い。地図情報はそこまでないが一つアテがある。そこに侵入して跡地の謎を解明するのが彼女の仕事だ。

「魔王もピリピリしてるし、世界の混乱もおさまらない。ヘイダルの仲間にも最近裏切り者が出た。シナジールの濫用者も多い……本当に世の中変わったよね」

墓の前で彼女はそう言った。時代の変化に必死にしがみ付き、濁流を遡っている彼女たちにしてみれば世界を織りなす意識に一言ずつ文句を言っていきたいぐらいだ。

彼女の目の中は熱い決意が激っていた。

「私たちの姫もすぐに戻ってきてくれるはずさ。爆発に巻き込まれたとしても一度は無事なはず。あの執念があれば」

研究では過程に何が引き起こされるかわかったものじゃない。2区の研究員がまだ幼い子供に秘密裏に施術したことで5区に左遷されることだってあった。ただ、今となってはその赤ん坊を欲しているのはこちら側だ。

「救世主かもしれないし、混沌を引き起こすびつくり箱かもしれない。

もしくはただの一般人か。他のシナジーを概念の理解していない人間への付与。今まで人体実験をしていないと言い張っていたけど、それが漏洩したら不味いからってね…。」

彼女は不意に空腹を覚えた。あらゆるポケットを探すが食料が尽きたらしい。5区の物価からして人間の食べるものは2区の15倍ほどの値段だ。だからいつまで経っても5区は5区のままなんだ、と彼女は毒づいた。

「同志、ゆっくり眠ってね」

つけられたままの電気を彼女は消し、扉を閉めると蝶番に細工をして簡単に開かないようにする。もしこれを開けようとしたら大きな音がなり、通報されるだろう。彼女は次の一文を手紙に書き加えた。

” 5区に殺されていた。”

空腹を覚えその場を立ち去った彼女、グッドフェローズは爆発跡地に向かいながら道を歩いている。人間”に声をかけることにした。ただ、よくよく見渡してみても人間は存在しない。灰色のモヤがかかってきたところで跡地が近づいてきたと察していたが、そこで1人の男性を見つけた。路面電車を待っているようにも見えないし、ただそこに立ち尽くしているだけかのようにも見えたがグッドフェローズはその男性に声をかけた。

「すみませくん。ちよつといいですか？」

男性は彼女の方を見た。少なくとも人間だ。機械ではない。男性は答える。

「なんででしょうか」

「ここら辺に栄養食以外で食べれるもの売ってる場所ってあります？食糧切れちゃったみたいで」

彼女は申し訳なさそうに言った。一方の男性は5区で見ることのないような純然な笑顔に少々安堵の表情を浮かべていた。

「では、この通りを真っ直ぐ行き、二つある建物の間の路地を通れば地下への階段があります。そこでは1区の追放された伯爵の隠れ家がある。彼はお人好しだからきつと助けてくれるはずさ」

グッドフェローズは感謝の辞を述べ、その場を去った。男性は通りすぎる時に彼女の目を一瞬だけ見た。

彼女は7区の人間だった。彼女がその場を去り、男が路面電車に乗るまで彼は7区の人間が5区にいる理由を考え続けていた。7区といえは貧困と犯罪の都市であるという偏見があるためにこうした目の内の分別化に差別は生まれやすい。

彼女は言われた通り、5区の裏路地に消えた。地下への階段とやらは蓋をさっていて、開けるには相当の力と慎重さがないと無理に思えたが、彼女は少しずつ蓋を開け、自分が通れるぐらいの隙間を作ってそこに体をねじ込んだ。

「…オーケー？少なくとも洞窟みたいな自然物ではないね。あつ、

さっきの人にそっからの行動聞いてなかったな」

降り立った場所は白を基調とした単調な廊下で、いかにも5区が好みそうな無機質さを醸し出していた。彼女はゆっくりと目を閉じ、過去を見た。ここを通る人間の服装は様々で、皆一様に彼女の体の向いている先に行っている。瞬きを一つして、またも目薬を垂らす。彼女はボイスレコーダーを記録し、メモを裏ポケットから胸ポケットまで移動させた。グッドフェローズの足音だけが反響し、強固な扉に着くまでそれは揺るがなかった。

ちようどそこから男性が出てくるところだった。服装は5区郊外と大して変わらず、一見貧しくも見えるが、1区が施したのだろう伯爵のバツジだけは変わらずつけているままだった。

「…おや、君は誰だろう?」

伯爵はグッドフェローズを見つけると即座に反応した。彼女も冷静を保ち、答える。

「7区出身のグッドフェローズと言います。僭越ながら栄養食以外を食べられるのはここ以外無いと聞きました」

彼女は「へへ」と顔では笑っていた。伯爵も、その返答に笑みを持つ。

「そうか。私は1区出身のデヴオン伯爵。ここで出会ったのも何かの運命。どうぞ、この先に進んで少し待っていてください」

彼女はその言葉に甘え、デヴオン氏の開けた扉に入っていった。内装は廊下と大して変わらないが、必要なものは揃っている執務室とといった様子だった。椅子に座り、メモを開くと、これまでの動向を書き、最後にデヴオン伯爵と記し、下に箇条書きのための点を用意した。

彼女は待っている間、デヴオン氏とどのような話をしようか悩んでいた。1区の位を持つ者でありながら5区に左遷されるというのは珍しいことで、こんな施設を作るぐらいだからさぞ5区を知っているに違いない。更には1区の数年前だとしてもその時の状況を知ることとは価値がある。このような情報源をグッドフェローズは望んでおり、まさに運命とも思った。

十数分すると足音が聞こえ始め、グッドフェローズはメモを閉まっ

た。扉が開かれると、デヴォン氏が彼女の前のテーブルに料理を置く。パンとバター、コーンポタージュにサラダ、スクランブルエッグ。彼女の目は輝いた。

「どうぞ、お食べになってください。毒か何かを仕入れる資金もないので安心して大丈夫ですから」

グッドフェローズはパンにバターを塗り、頬張った。久しい食事であり、彼女は喜んでいた。

食べ進め、パンは無くなり、サラダが半分を切ったところで彼女は一度食事の手を止め、伯爵に問うた。

「5区はどのような場所だと思っています?」

デヴォン氏は手を組み、暫く彼女から視線を逸らし、考えていた。彼からしてみれば一介の訪問者に教える意味はあるのかどうか。教えたとしてそれが瑕疵にならないかを心配していた。しかし、グッドフェローズが返答を食事の手を止めてまで待っているのを見て罪悪感が湧いたか、答え始めた。

「5区: つまりは4番目に裕福な区とは言われていますが、結局のところ彼らの収入源というのは特別認可の利用料や、罰金政策などが主流であるので7区と生産の部類で張り合えるかどうかと言われればそれは無理な話です。結局の所、5区は極端に貧しく、極端に富んでいます」

彼女は「ほうほう」と相槌を打った。伯爵は続ける。

「その特別認可も最近を取りづらく、利用価値の低いもので溢れ、それでは元の信念である『優れた研究は優れているだけ優遇されるべきである』という理想は崩壊してしまいます。既に1区や2区は同じような条例を作り、5区産の認可は殆ど現在では利用されておりません」それは仕入れられていない情報だった。2区の区特有特別認可は知っていたが、1区のも既にあるとは。彼女が意外そうな顔をしていると、デヴォン氏は彼女に同じような質問をした。

「7区はどのような場所でしょうか?」

彼女はすぐに答えることができた。

『自然が人々を侵し、人々は技術を蝕んでいる』。ある本からの引用

ですけど、それが一番7区を指しているわかりやすい例えだと思っています。7区は技術革新を無理に進めた結果、生産量や負債が釣り合わずに崩壊した場所です。ああ、旅行にはいい場所ですけど」

伯爵は冗談めかして話すグッドフェローズの目を見つめた。正真正銘の7区の住民。他の区へ行くことすら相当の勇気が必要だったろうに、相当の経験があつてのことだろうか。

「確かに7区は会談にもよく使われるくらいのもので平和です。暴動や革命戦争なんて起こらないでしょう。しかし、貴女はそんな生活から抜け出した。それはなぜですか？」

「明らかに私は世界において行かれていますと思ったから、ですかね。度々新聞を届けに来てくれた人がいるんですよ。その人はいつつも陽が沈んだ頃にやってくるのですが私はその人に無茶を言つて新聞を見せてもらい、通訳までしてもらいました。そこには私の知っている世界より明らかに広い世界がありました」

彼女は半分嘘の話を続ける。

「そこで私はもつと世界を広くしたいと思い、徒歩で7区から脱出しました。しかし空腹で倒れ、目を覚ました場所は2区でした」

「2区？」

伯爵は思わず聞き返した。区の中では比較的良心的な2区だが、7区から出てきた少女を救出し、治療するほどだろうか？

「多分気紛れでしょう。彼らの中でも優しい人間が私を癒してくれました。そこからは自分をおいてくれる場所を探し、最終的には5区にも来られるようになりました」

「てつきり、私は君が7区から5区に来たのかと思っていた。確かに、その服は5区のものではないだろうし、私が浅はかだった」

いやいや、と彼女は手を動かした。間違つてもしょうがないという意味だ。彼女はサラダにフォークを刺し、口に運ぶ。

「その、君を置いてくれる場所について私は目星があるのだが…確か、ヘイダルという組織ではなかったか？」

「…ああ、まあ、そうです」

グッドフェローズは内心焦っていたが、一応の返答は為した。伯爵

は回想しながら話した。

「その組織は有名ですよ。特に陰謀論関連ですが：： 1区の王が関わっているという噂があつてですね。何せ、1区直属組織である諜報機関『金枝』から派生したものだと言われている、開示された文書にもその機関のメンバーの名前が複数載っていたものですから。ただの噂で済む話ですけどね。ノイズの研究や難民救済など、立派なことじゃないですか」

グッドフェローズはそれに苦笑いで返した。実際の活動などは大抵闇に紛れている。表出していつているのがその活動：： というだけにヘイダルをみていた。

「掲示板は見たかな？ 2区の研究所が5区にも展開すると聞いていてね。話を聞くうちに関係者かと思つたからだ。パンはもつというかい？」

グッドフェローズは首を横に振つた。出された料理は完食し、手を合わせた。

「今後、君や仲間達がきた時にもし緊急の事態があつた場合ここに来なさい。私も私の使いもきつと歓迎するはずだ」

グッドフェローズは席を立ち、お礼を言うのと廊下に出た。デヴオン伯爵は去る彼女の背中をぼーっと眺めていた。彼女はメモを取り出し、箇条書きの点から言葉を並べる。不思議な体験もあるものだなと思うし、デヴオン氏の喋り方は安心をもたらしてくれる。しかし実際、彼の話したことに彼自身のごとは一切含まれていなかったのでは？

研究所は研究をするだけでなく、爆発跡地の監視も含まれる。あの跡地には何かがある。寄り道をしてしまったが、一步一步真実に近づいていることはわかる。

グッドフェローズはボイスレコーダーを切つた。

3人は一つのチームだった。チーフ、グッドフェローズ、モラル。彼らはヘイダルに所属しており、直轄の2区にある研究所を5区に派生させようと交渉する任務を持っていた。チーフ、モラルは交渉係。グッドフェローズはまた別の目的をもって行動する。元々、彼らの目的は交渉だけではないのだ。

「爆発跡地に人が住んでる？」

グッドフェローズは資料を見て頭を掻いた。

応接室。彼らはここから別行動し、それぞれ5区に行くことになっている。

「そうだ。小高い場所に何かがあるかもしれないと上はそう言っている。組織か、ただの物好き達のアジトか、もしくはもつと巨大な何かは検討がついていなかったが、先日、根拠が出てきたんだ」

モラルはチーフを見る。まだ入職して5ヶ月程度であり、目にはまだ不安が残っていた。

「パイプラインが発覚した。更に爆発跡地に侵入する人間を追い払う何者かが居ると証言もあった。5区の格好でもなく、整理でもないで、あれば誰なのか」

「それで、新しい組織だと言いたいんですか？」

チーフは頷いた。グッドフェローズは推測を立てる。5区の郊外、爆発跡地近郊は地価が安いだろうし5区が届きにくい。そこに研究所を建てることで隠密行動が可能となる。更に2区の研究者にはそこに興味を持っていたりするし、多分、ノイズが生じてから6区の不自然災害の次の大規模災害であったから関連があると推測しているのだろう。

「フェローさんは我々の言葉を受け取って、現地で活動してもらおう。5区って私も一応知ってはいますけど、こういう職についていなければ馴染みも薄い気がします」

「そうだな。5区の収入源は特別認可による使用料だ。それに加えて生活費の押収や他区からの”押し付け費”とか。故に、産業などで5

区を聞くことはないだろう。他からは監獄とも評される悪辣な都市だ」

そんな場所がこの世にあるのかどうかモラルはしばし疑った。グッドフェローズはそれを察して気まずく頷いた。

「…まあ、別に私はいいいけどさ。モラルはどうして連れて行くの？まだ組織に入って若いしき」

宥めるように彼女は言った。チーフはため息をついて言う。

「俺だってそうはしたくなかったが、上の言葉を引用すれば『新人としてでなく1人の同志として扱え。我々は皆仲間でありそこに分け隔てはあつてはならない』だそうだ。言いたい事を要約すれば、3人一緒にいかなければ首切りつて事だ」

再度彼女はモラルの顔を見たが行きたいのか行きたくないんだかよくわからない顔をしている。

「チーフ達は交渉終わったらどうするの？1回戻る？」

「そうなるな。道中の3区で一度泊まって後にフェローと合流する。フェローは5区のラインの…名前は確かクラシックだったはずだ。コンタクトを取って泊まらせてもらえ」

フェローはチーフから渡された地図を見た。跡地に近いから路面電車を經由する他ないと判断した。フェローは疑り深くこう言った。

「そのクラシックって人は？」

「5区から我々へ情報を3月毎に送付してくる優秀なセンサーだ。5区の宿泊施設よりか全然マシな家に住んでいるが、もし出会えなかつたら…まあ、そうなるな」

フェローは立ち上がり伸びをした。チーフも話の締めに入る。モラルだけがこの空気に置いていかれていた。

「まあ慣れることだ。モラル、上は同志とみろと言っているが、俺は新人と見ているだけでお前を同志でないと思つたことはない。5区でも毅然な態度で望んでほしい」

チーフは携帯に着信を見つけ、かけ直すために席を立った。グッドフェローズは困惑したままの研究員にお菓子を渡した。

「チーフは怖い？」

彼女は小声で言った。モラルはチーフの後ろ姿を追いながら答える。

「怖いと感じたことは正直殆どありません。確かに様相や言葉に気迫がありますけど、一つの事に打ち込む真摯な人だと思います」

彼女は「ふくん」と答えた。同感したのだろうか、お菓子をもう一つ渡す。

「ま、頑張りなよ。どうせ一番大変なのは私だし、楽しんできな」

フェローはあくびを一つして携帯機を確認する。

チーフは電話元を確認する。「金枝」と書かれている。

「随分、あなた方は順調なようですね」

「… 何故貴方が私にお言葉を？」

彼の出す言葉は若干震えている。異端者として描かれた彼らにいわゆる正しい教えを稱する彼ら側から伝えられることなどないはずだった。

「我々は貴方達に期待しているのですよ。それは我々でなく、魔王様も同様です。貴方達は重要な任務を背負って5区へと行くのです。ただの出張でなく、これからの我々の歩む道を照らす灯火となり得ます。同志として、我らヘイダルの構成員は一刻も早く真相へ辿り着く必要がありますから」

チーフは重々しく頷いた。背後を振り返って、2人がいる事を確認する。こんな深い闇に連れてこられても懸命に今を生きている。

「… わかっています。しかし我々を近くする貴方達は我々に対しどのような色彩で見ているか貴方達は理解できていません。我々の行う行動は全てヘイダルのため、病める同志の為と理解していただく必要があります」

「既にわかっておりますよ。貴方だってヘイダルの深度3ならば、同じ狂気に当てられた者を救う共通理念は理解しているでしょう」

チーフはもう一度通話相手を見た。「金枝」と書かれている。

「誰だって松明の無い道を歩くことは拒まれます。果敢に挑む者も少ないでしょう。あなた方は先駆けとなり、我々に道を示すのです。これは他の者にも頼めません」

「姫にもですか」

彼は前を向いて言った。電気のない廊下が続いている。相手は暫く黙っていたが、やがて答えた。

「貴方は面白い方ですね。彼女はあくまで隠滅のためであって改善の希望ではありません。居ない方が円滑に物事が進むのでは無いですか」

チーフは通話を切った。これ以上生産性がないと判断したからだ。回れ右してチームへと帰る。

「計画を一部変更しよう」

彼らのリーダーは言う。

「徹底的にやる。俺は真相に辿り着く必要がある」

修正版災害レポート1454/11/12（最終更新日：1455
/09/12）

以降の編集履歴も含め改訂を施し、原文は削除されます。

ヘイダル

一被害人数（推定）

死者：21万人

重軽傷者：194万人

行方不明者：1.9万人

0～10歳：24%

11～20歳：11%

21～30歳：14%

31～40歳：21%

41～50歳：30%

一災害要因

不明（現地調査チームが研究中）

一経済的損害

生産率5%低下

人口4%減少（死者・行方不明者総計）

一6区守護団の行動

・重軽傷者の手当て及び治療費の無料化

災害により負傷・死亡した区民への給付金と医療物資の贈与を行う。現状災害発生から1週間、コロニーの住人に限定される。

・コロニーへの物資援助

食糧を始めとし、布、服、清潔な水などを贈与。中央第三コロニーのみ、悪天候のため贈与はされず2日後に再度施行される。

・他区からの募金の開始

2,3,5区を対象にしている。「募金は良心であって後に何かを有利に進める踏み台ではない」と書き記してある。

・2区パーソナリティモーヴメントへの打診、災害援助

パーソナリタイムーヴメントからは調査チーム、統括チーム、医療チーム、援助チーム、外交チームがそれぞれ派遣され、各チームで一定限度の行動を許す。

— 6区警備団の行動

・ 行方不明者捜索

2区パーソナリタイムーヴメント調査チームと共に行動することを強制。捜索と共に不自然なものがあつた場合のサンプル採取も命じられる。

・ 現地住民からの災害前後の様子聴き取り

災害後、コロニー内での重度の精神過負荷を受けた人間が想定より多く、カウンセリングと並行して災害前後の不自然なものを割り出す。

・ 災害跡地の安全確保

項目1と同様。

・ 医師団の派遣

医療チームと連携することを命じる。安楽死の選択を可能にする。

— 6区聴罪団の行動

・ 2区信用銀行からの債券発布

経済損失分（今年予算の22%分）を発布予定。外交チームと共に行くように命じる。

・ 今後の経済方針の発表

災害を免れた区民には災害跡地によらないよう警告し、また、いつでも移住が可能なように用意を進めることを推奨する。

|| || ||

災害レポート「編集履歴」 1454 / 11 / 24

・ 死者数を22万人に書き換える。

・ 重軽傷者を195万人に書き換える。

・ 行方不明者：0.5万人に書き換える。

編集者コメント：

凄惨な災害だった。そう言う他はない。6区のサブ主要都市が壊滅するとは誰も思つてはいなかつたろう。

1区から苦情が来ている。「7区からの新鮮な野菜はどうなったんだ！」ってな。意味わかんねえ。

奴らにとって自分第一なのは変わらない。まあ俺らもそうか。死んでしまった人が大量にいることより自分が生きている事に安堵する。

|| ||

災害レポート「編集履歴」 1454 / 11 / 27

経済的損害

・生産率を7%低下に書き換える。

|| ||

災害レポート「編集履歴」 1454 / 12 / 04

・古い記述として6区守護団、6区護衛団、6区聴罪団の行動の項目を消去。新規のものを追記。

— 6区守護団

・5区移住希望者の援助

5区への移住希望者が被災者の12%の為、それらに給料と比例した生活安定費を給付。その代わり、移住が円滑に進むように先んじて移住し、5区の郊外の家を借りることを命じる。

・7区への大規模移住の発表

7区への移住希望者が被災者の34%の為、以前より移住を検討していた人間も含め、大規模な移住を行うと宣言する。

— 6区警備団

・災害跡地の放棄を発表

災害跡地の調査から再び住めるようになるには最低75年は必要だと判断される。土壌から未知の生物が確認されたため、2区がここが汚染地域だと発表した事にも影響される。

・現地調査団の引き上げ

これ以上の負担は経済の過度な圧迫につながるので2区チームに引き上げ要求。数日後、2区の調査団が訪れ災害の様子を確認し、未だ援助が必要だと思った場合には継続すると伝言がある。

— 6区聴罪団

・今後の経済政策を発表

機械を区営以外売り払い、農業を主体とした第一次産業を発展させるように伝える。また、他区での新興事業の派遣場所として6区の経済区域を紹介する方針。

編集者コメント：

サブ主要都市：…今では改名されていたな。オートファゴソーム。そこに居住しているすべての人間はそこから放出されることとなった。他区への移住を決めた区民は勇敢であると言えよう。何故ならそこはもうじき6区では無くなるから。6区でなくなればそこは未定義区域となり、そこに存在する人間はすべての権利を放棄したとみなされる。

|| || ||

災害レポート「編集履歴」

・災害要因を書き換える。

一 災害要因

不自然な超常現象

災害発生5分前：

不自然な雑音が聞こえ始める。

野鳥が一齐に飛び立つ。

飼育中の動物が吠え始める。

災害発生直前：

窓から閃光が走る。

外壁に切れ込みが入る。

災害発生直後：

空が不自然に明るくなる

窓が溶け落ちている。

月が大きく見える。

災害発生15分後：

ノイズが鳴り止まない（周囲の人間と同様）

これらは6区警備団からの発表を写したものだ。

|| || ||

災害レポート「編集履歴」 1454/06/04

・災害要因を書き換え

— 災害要因

月

|| || ||

災害レポート「編集履歴」 1455/09/12

我々はすべての脅威に対して不安を持たせてはならないと
思っている。

B

バベルには特殊行動課と言うものが存在する。皆人それが傀儡のような体裁だけの課だと思っているが実際はそうではない。個々が個々の目的を持って動いているのがその特殊行動課で、その1人、Guardianは殺しを伴わない護衛を行なっている。

「ありがとうございます。ロイエさん」

Guardianは頷いた。護衛をするものとは思えないほどに装備という装備もなく、武器という武器もない。ただ不思議なことに彼女はやり遂げる。

「まさか息子を探してくれた上に施設に預けず返してくれるとは……思っていませんでした」

6区の郵便配達員は言った。Guardianは首をかしげる。ただただ不思議と思っただけのように彼女は言った。

「それが依頼じゃないの？」

「正直に申し上げますと、無理だと思っていました。6区から抜け出し1区へ行ったのでしたらどこかの伯爵が捕まえてもおかしくありませんでしたから」

Guardianの隣には殆ど寝ているような子供がいた。彼女は肩を寄せ、倒れないようにする。その子供には多少の擦り傷があったものの消毒済みのようで、一生残るような傷は全く無かった。

「さあ、家が上がってください。息子がどう言った経緯を辿ったのかわらなければどこにお詫びに行けばいいのかわかりませんし」

Guardianは微睡の男子の肩を揺すり、階段をゆっくりと登っていった。家に入ると6区にしてはしっかりとした家で、依頼人は紅茶を淹れているようだった。光や室温も十分に、開放感のある良い家は彼女の目を輝かせる。

彼女らは椅子に座り、紅茶とお菓子を受け取った。まだ湯気の出るそれを呆けた顔で見ていると、話が始まる。

「息子はどこにいましたか。1区というのは目撃情報があったのですか」

「元デヴオン伯爵の家。裏庭の畑に座っていた。1区の境界からみて4キロメートルくらいかな…。」

割と都市に近く、依頼人は驚いた。デヴオン伯爵はすこし前に追放された郊外の貴族だという認識であったが、そこまでは一応距離があつたはずだ。

「私が近づいたらこの子逃げちゃつて。伯爵の空き家に入ったから、追つた。そしたら誰もいないはずなのに人がいたから早く連れて帰ろうと思つて…。」

「待つてください。伯爵はもういないですよね?」

Guardianは頷いた。

「あなたの子供を狙っているわけではないから、元々捕まえる気はなかつたんだと思う。1区にも小汚い人はいるけど、あの感じはまた違う気がする。けど、見られなくなつたのか数人はこの子を狙つて上にのぼつていった」

しばらく黙り込んだ。彼女の中で、彼女の視界に映つたそれが何であつたかを巡らせていたがそうはいかなかつた。

「…まあ、あなたの子供は2階の資料室の隣の部屋の隅にいた。そこで話すのはダメな気がしたからこの子を抱えて飛び降りて、伯爵の家を離れた」

「大胆ですね…。」

依頼人はそれだけ言った。Guardianからしてみればそういうシチュエーションの場合とりあえず現場から離れることを教わつたからそうしただけであつた。

「結局、中にいた人の正体はわからなかつたけど、1区の”調整”だったのかなあ。でも何かを探しているようだったし、もしあのまま様子を伺つていたらどんな目にあつていたかわからない」

「本当にありがとうございます。お話はもつと聞きたいのですがもうすぐ夜ですからお早めに帰つたほうがよおしいかと。報酬は直接渡してほしいとのことだったので今持つてきます。あなたが私の家から出て行くところを誰かが見たらどうなるのか分かりませんから」

依頼人は2階に上がつていった。Guardianは紅茶に手を

つけないでいた、代わりに個包装されたお菓子だけを食べている。「毒が入っているかもしれないから食べちゃダメだよ」という言いづつを遵守している。

「これです。これがどういうものなのか私達は知らないのですが、ともかく差し上げます」

それは無機質な箱だった。黒色一色でどこが蓋となっているかすらわからない嚴重そうな箱。Guardianはそれを何の疑問にも思わず受け取った。信頼を第一に置かれる仕事であるから相手も自分も誠実であつたほうがいい。自分が誠実であるなら相手も誠実だろう。

「それですわね・・・」

Guardianが帰ろうと家の外に出てバベルに帰ろうとした時依頼人は小声で話しかけてきた。彼女は振り返りそちらを見る。仕切りに護衛対象を見て移動しないか見張っているようだった。彼は話す。

「1区には優秀な諜報機関があります。私も詳細は知らないのですが1区で活動する時には十二分に気をつけてください。彼らがどこで見て1区を巡らそうとしているかは誰にも見当がついていませんから」

「分かった。私も考えたけど、デヴォン伯爵の邸宅にいたのはあなたの言ったそれだと思う。私もその機関に関してはある程度知ってる。デヴォン伯爵は何をしたの？」

依頼人はドアを閉めた。荒涼とした風が吹くが両者ともにそこまですで気にはしていない。

「革命に参加したんですよ。根本革命派に唆されたのかデヴォン伯爵は1区を嗅ぎ回っていたみたいで・・・それがバレたんだと思います」
「なるほどね」

Guardianはそれを聞くと手を小さく振り帰路を歩き始める。途中思い出したかのように彼女は自分に言い聞かせるように呟いた。黒い箱をギュツと抱く。

「全てを知る必要、私はないと思う。人の話を聞いていれば大抵なん

とかうまく行くから」

彼女のその言葉には一定の未練があった。自分が助けられなかった人は自分が知りたがったから死んだのだと思っているからだ。それから彼女はより一層悪くいえば人の言いなりになってきている。箱を回して見てみる。やはり凹凸の何も無い簡素なデザインだ。振ってみるとカラカラと音がする。石のようだった。

彼女はシンパシーを用いて、その箱の外装の一部を液体化させる。中に入っていたのはコンクリートの破片みたいなもので、一緒に小さなメモ用紙が入っている。それだけ取り出して、Guardianはその中身を見た。

” 寄贈：1454 / 11 / 19, 6区

災害跡地の瓦礫の破片。調査対象から保存に切り替え。

「パソナリタイムーヴメント調査チーム」

途端に彼女の体を痛みが走り、ネガティブな思考から彼女は紙を落とした。上を向いた。月が無い。月が無い。

ノイズが体を反響する。黒い箱の中から聞こえてくる歌。彼女は液体化を戻した。

今日は新月だったな。だからそんな無防備に夜に出歩いたのか。よろよろとGuardianは箱と紙を拾い、紙はポケットにしまった。

「…何?これ」

呟いた。しかしそれに対する返答があるわけではない。代わりに別の声が近くで聞こえる。

「大丈夫かな」

Guardianは振り向いた。声の主はその目の鋭さに一瞬気圧されたように見える。

「どうしてこんな夜中に6区にいるの?家出?」

「…そうじゃない」

Guardianは黒い箱を隠しながら答えた。しかし相手はそれが強がりに聞こえたみたいで、手を差し出す。

「遠慮しないで!ちやうど私も散歩の帰りだから」

「泊めてくれるのならありがたいとは思うけど、ごめん。私は本当に家出しているわけじゃ無いから」

手を引つ込める。肩から見える傷はノイズに感染していることを表していた。2人はどちらも差別化が進む病気に罹っていた。それに気づくと、Guardianはその人の温情を断つたのが急に申し訳なくなつて、言った。

「…でも、行つても迷惑にならないなら…うん。行くよ」

Guardianは一応、関わってはいけない家や種類に関してしつこく言われていたから、それに倣つて言う。

「あなたはどこの人？」

女性はキツチリと姿勢を正し、はつきりとした声で言った。

「I区デヴォン伯爵の一人娘、シャルル・デヴォン。ここあたりに住み始めたの」

Guardianはデヴォンという言葉に即座に反応した。ただその衝撃を隠したまま、「付いてきて」という追放された伯爵の娘に小走りで追いつく。

そこからはシャルルの質問が続いたが、それだけで夜は明けそうになる。

「もしもし？まだ御飯事を続けるつもりか？」

電話口、汎用型の密閉された部屋の中で椅子に座り、怠そうに体を揺らしながらAuge^{アウゲ}は聞いた。

「まあまあ、待たれよ。本題を早急に終わらせてしまったら我々の会話する意味など殆ど無くなってしまうのだから」

「そうだから言ってるの。Herz^{ヘルツ}…いや、ギヤドペカドル、さつさとヘイダルなんか辞めてしまえばいいのに」

両者はため息をついた。

「唯一の親戚に碍に扱われると流石の私も傷付くには変わらない。ヘイダルに留まる理由は幾度と無く言ってきただろう」

「魔王が見れるからでしょ？今日も人殺してんだだろうけどそんなことしてまで魔王に価値はあるの？」

Augeは電話線を指で巻いたり、それを解放したりして暇を埋めていた。暫くの熟考であったからそろそろ死んだかと冗談ながら彼女は思っていたが、ギヤドペカドルは落ち着いた声で話す。

「我々は普通、保護される対象ではあるが雁字搦めな程で無くてもいいということは理解してくれるだろうか。現に貴様が雁字搦めであるように。しかし殺人を促進させればさせるほど王様には近づいて行けるのだ。もし、その道中で臥したとしても王様であれば私を看取ってくれるだろう。それだけ、王様は慈悲深く、全ての人間に対し平等に接することができる人間だ」

”狂信者”は一つ大きく深呼吸をして、Augeに向かって言う。「まあ、雁字搦め過ぎるのも良く無い。実際、貴様の後方数メートル、誰かが会話を傍受している。偽の音声を流してはいるがな」

Augeはそのことを聞いて急に不安になり、自らの後方、扉の外を見る。そこには誰もいなかった。Augeはベッドに乱暴に座るとキレ気味で言う。背後は壁になった。

「おい、誰もいないんだけど。また御得意の冗談かよ」

「…いいや違う。もしかしたら貴様の仲間でも無いのかもしれないな

い。いや、待て、待て…。」

ギヤドペカドルは足の組み方を変えるほど熟考していた。彼女の頭の中では顔と名前のチェックリストが出現し、丹念にバツを付けていつていた。

「バベルに空間を婉曲させる様な人間は居るか？」

「いや、心当たりは殆どないけど」

ギヤドペカドルは1人の人間とその事象が確定していることでの組織同士の動きを予測していた。それらが導き出すA u g eへの影響を考え、半ば強引に言う。

「早く逃げた方が善い。貴様達の組織が軟弱だと言うことは把握して居たが正か其処までだとも思って無かった。私の所へ来なさい。あと数日で其処は陥落する。何なら今…。」

「はいはい落ち着けよ。どうしたんだ？急に捲し立てる様に話してや」

彼女は数秒間の沈黙を守った。

「居たんだ。過去を視れる唯一の人間が。異端者の片割れ。現地調査員の中で唯一の深度3。非感染者。死を悼む7区。良き同輩。彼女が未来から我々の会話を傍受していると考えるとヘイダルがバベルに侵攻する事が確定する。最善で在ってもバベルとヘイダルの接触は免れないだろう」

「まあいいじゃん。どうせこの会話も聴かれるんだったらさっさと本題話して終わりにすれば」

ギヤドペカドルは自分の大量の書類の乗った机を拳で殴った。紙は浮遊し、机は埋没する。電話線は宙に浮かび、やがて切れたが会話は続けられる。

「A u g e。良いから直ぐに脱出するんだ。直ぐ近くに居る。貴様の背後に忍び寄る影を私は許容できない！」

「…さっきまでの話は本当なんだよね？僕を誑かすような嘘ではなくて？」

彼女の口から怒号が放たれるのは総会議の時以来であったからA u g eは狼狽し、確認を取った。しかし、その受け入れ難い事実すら、

彼女が言うのだから合っているのだろうとも思っていた。一種の諦念だ。

「嘘な訳がない。同胞が居た。貴様の居るバベルにだ。T e s i t m O n yに掛け合ってみろ。もしくは人事のトップか、逃走するか。私が行っても良い。どれを貴様は選ぶんだ！」

どうせ逃げるなら…とA u g eは考えていた。絶滅黄昏種や特定保護種のように扱われた絶滅種を庇う人物なんて居ないだろうし、逃げられる可能性の最もあるギヤドペカドルに来てもらうかのほうを選ぶほう。

彼女は左目の眼帯をなぞった。瞬時に冷や汗が伝う。

「…逃げる。その方がいいと思う」

「分かった。如何程で準備が出来る？」

そう言いながらギヤドペカドルは受話器だけを持って準備を進めていた。医薬品、食料、武器、金、通行許可証、深度4バツジ。

「別に持っていくものはないけど、話しておきたい人はいる」

「では今から向かう。2日もあれば到着するだろう」

A u g eからは素っ頓狂な疑問符が声として出た。如何なる交通機関を使用したとしてもギヤドペカドルのいるヘイダルの基地からバベルまでは4日はかかるはずだ。

「…どうやって行くの？」

「走ってだ。大変な思いの中で寝る訳には行かない」

もちろん、ギヤドペカドルだって1人の人間だ。

「えっ馬鹿？」

「そんな事言うな。馬鹿は感染する。貴様まで馬鹿になって仕舞うと後が無くなる。まあ準備して直ぐに行く。貴様も動向には良く気を付ける方がいい」

彼女は机に戻り、受話器を元あった場所におこうとした。最後の一言を言う。

「私は全ての脅威に対して不安を持たせてはならないと思っている」

受話器は空中で手を離され、落下した。

人事ファイル（最終更新日：1455/09/12）

項目名：ギヤドペカドル

一 諸情報

- ・ 性別：女性
- ・ 身長：177センチメートル
- ・ 出身：未公表
- ・ ノイズ感染の有無：非感染
- ・ 役職：ヘイダル直轄戦闘部隊幹部，深度4
- ・ 忠誠心テスト：498点（全体17位）
- ・ 戦闘能力テスト：1548点（全体1位）
- ・ 精神テスト：軽微な精神不安定症

一 活動事由

ヘイダルの求める世界により近づくために。

一 活動内容

ヘイダルに敵対する組織やグループの粛清。新人研修。

一 活動実績

- ・ 第三薄明：197件

小規模な活動であり、組織はこれに含まれない。見つけ出すのが容易なほどに機密管理体制が為されておらず、主に各区の失業者などの貧民、ハイイテリジエンスの技術者が挙げられる。

- ・ 第二薄明：211件

十数人〜数十人の比較的中規模な組織や活動。明らかな基地を持ち、技術を少なからず持っているもの。

- ・ 第一薄明：45件

第二薄明以上の規模であり、ヘイダルに影響を及ぼしかねないと判断される組織。通常、摘発にはかなりの時間を要し、小隊規模では制圧が不可能。また、隠蔽も難しく、表沙汰になりやすい厄介なもの。

- ・ 極夜：443件

小規模から大規模なものまで含まれる。機密性に優れ、区の影響下

であつても人員を揃え活動を可能にしている。

・白夜：8件

第一薄明、第二薄明が大規模に活動を起こし、一般区民から死傷者が出るほどの騒ぎを起こした組織やグループ。これらに出動する人員は身体の動きに影響を及ぼすシンパシーの利用を控え、数人の小隊規模で遂行しなくてはならない。

・1区第9次大規模デモ行進の一部暴徒鎮圧

・6区諜報組織の1区核心部侵入による粛清

・7区の大規模マフィア集合体の傀儡組織含めた殲滅

これらには6区聴罪団4名、5区諜報機関のメンバー2名が含まれる。

・4区根絶

最後の4区であるユイ・ペデエンスを暗殺した。

これらは彼女が単独で行った実績である。(共同任務時彼女はその任務を自分の功績としない)

—シンパシー

彼女のシンパシーは非公開であり、任務中、通常業務中でもその片鱗を見ることは無い。故に、一般構成員が見れる範囲で彼女の秘密を暴くことはできないだろう。

—戦闘スタイル

主に細剣を左手で扱い、銃を右手で扱う。銃を扱う構成員は非常に珍しく、反動が大き過ぎる点や、有効射程が短い、銃弾の作成コストが高いなど制御は相当難しい。シナジーを含んだ服と靴を身につけ、本人自身の類稀な戦闘技術と組み合わせ確実に勝利する。

彼女の口から「敗北」と言う言葉は聞いた事がない。「撤退」「突入」は良く聞く言葉ではある。彼女は一对多をできるだけ避け、ターゲットを集団から引き離し、各個撃破することを得意とする。不思議と彼女は単独の敵と接触する事が多く、その運が彼女をここまで押し上げた理由となるだろう。

その戦闘スタイルから多人数での行動を得意とせず、するとしても同じ系統、つまりはアサシンとしか組むことは無い。それでもター

ゲットの殲滅速度から他のメンバーが片付ける予定の敵を先んじている事もあるため、本質的に彼女に集団行動は難しいだろう。

一性格

排他的であり、他人とのコミュニケーションをできるだけ避ける。ただ、電話で何かを話している声や姿は度々受け取れる。右目の眼帯について話してはならず、会話の内容も小難しく、彼女と継続的に会話をしようと試みる人間は殆どいない。

いつも冷静である様に見えるが人の重大なことに関しては人一倍過敏に反応し、即座に行動を引き起こす。それが如何に無鉄砲なものであるようと彼女のスペックの高さから案外どれも丸く収まってしま

う。

1区の区長である王を異様に信仰しており、王の言うことは絶対だと考えている節がいくつも見られる。通常受けることのない任務でも王が関係していることを知ると確実に引き受けるため、その信仰心がよく見れる。

一採用時

ギヤドペカドルの入社は公開されていないが、本人曰く未だ新参であるようで、路頭に迷ったところで仕事を紹介してくれた人がいたと語っている。しかし、彼女の言う紹介人の特徴とヘイダルの構成員の顔は合致するものがなく、真偽が問われている。

眼帯については率直に「怪我をした」とだけ言い、それ以上のことを言おうとはしていない。任務での失敗はあるにはあるがその全てが軽微な損害であり、右目の負傷につながるとは考えにくい。

一作成者コメント

彼女の才能は類い稀なもので、幸いにも組織に残り続けてくれると言うのだからラッキーだ。ヘイダルはこの職員を離してはいけな

と思う。

ただ一つ心配なのが彼女のシンパシーが明かされていないと言うことだ。もしかしたらスパイかもしれないと言う疑念はいつまでも晴れることは無いだろう。そもそも、シンパシーというのは割と直ぐにバレるものだというのにこれだけ功績を残していても情報の一つ

ないのは不自然だ。

戦闘狂というわけではない。そうでないからこそ厄介だと感じる。彼女のシンパシーは多分戦闘に関わるものではないのだろう。現に正面からの衝突を彼女は避ける傾向にある。より良い世界を目指すという信念こそ立派ではあるが、それを言いように扱う人間も勿論存在する。彼女の理念は他の人間の悪心によって歪んでしまうのか？

荘厳な扉を静かに開ける。開けた天井には星々が映り、それぞれの光を床の黒い石が反射して鏡の様になっている。その石は机にも柱にも、壁にも用いられており、一面のみはガラスだった。装飾の、結晶のようなライトが天井から吊り下がっているが、それらは点灯していない。月明かりのみが彼女を照らしていた。広い部屋だ。

Herzの息は絶え絶えで、その机の先にいるターゲットに焦点を合わせるのにも時間がかかった。

「…随分と長い間会う事がなかったのではないだろうか、妾達は遂に君がここに来てくれたこと、感謝しよう」

4区は言った。ただ最後の1人であるから、その発言一つ一つは4区を代表しているとも言える。

「ペデエンス…」

Herzはその名前を言った。4区は満足げに頷いた。

「まず呼吸を整えるのが先のようなだ。ああ、待ちますよ」

フラフラと彼女はその扉を閉じた。2人だけの空間、廊下には2区から取り寄せた近衛兵達の死体が転がっている。彼女は自身の細剣を鞘に収め、拳銃を右腰のホルダーに戻した。そして深呼吸を一つする。

「本当に、久しいよ。私が此処で何をするか、貴様は良く分かっているだろう。私は組織として…貴様を暗殺しに来た」

4区は首を横に振った。あくまでも優しい笑顔だ。

「1区の諜報機関は妾を殺そうとしているのではなくて、存在を無くして欲しいと言っていた。だから、何も君が罪を着なくてもいい方法があるんじゃないかしら」

「…確かにそうではある。然し…矛盾に感じるかもしれないが、私は貴様を暗殺することに対して罪悪感がある。殺しを伴わない任務の遂行も勿論可能だ。それをしない理由、貴様に判るか？」

ペデエンスは暫く考えた。2人とも時間を気にするそぶりはない。そこは永遠にも等しい時間が1秒の間に立っていたのかもしれない。

し、もしくは彼女ら2人を置いて永遠に時が進んでいるのかもしれない。

「親戚の事でしょうか？あなた達の大切な仲間の幸福を確かに妾はこの手で握り潰した。しかし、それを未だ信じているの？」

「…今更言い訳など聞きたくも無い。負い目が一つ増えるだけになるからね」

4区は机に手を置くと、シンパシーを使った。瞬時に机の表面の石は細かく分離し、粉が霧散した。それらは再び凝集すると人間の像を形造る。それはHerzと親戚たちの家族写真と同一の配置だった。

「4区は混血を嫌う…それはあなたにはよく理解できることでしょう」

「余りその話は辞めて欲しい物だな。4区が其れを言うのは些か私は好まない」

4区はため息を吐き、ガラス越しに見える星空を見た。Herzも釣られて外の景色を見た。

「人間は空に浮かぶ星のようだとは思わないかな？Herz。一つ一つが輝いているものもあれば、光を出さなかったり。自ら光を出す星もあれば他の星の光を反射して輝ける星だっている。光を見るだけでなく、その光が何よって放たれているのか。弱い光だとしても遠いからかもしれない。結局、上面で判断できないことも多い」

Herzは静かに話を聞いている。シンパシーの終わりが近いのか親戚達の像は段々と元の机の場所に戻っていった。

「もし、その光が何かの犠牲によつて成り立っているのであればそれは正しい光とは言えないと妾は思う。真に求めるべき光は自らが光となり、それを享受できる正しいもののみだ。光を齎す人間はそう簡単にいるものではないけどね。無いと決めつけるよりいると思つて探していた方が気が楽でしょう？」

4区は席を立った。Herzは剣に手を掛けるが、親戚の像がなくなっていることに今更気づいた。4区はそのままガラスの方へ向かい、月光の白柱の中に立った。Herzは先ほどから一步も動かないでいる。彼女の中での恨みと悩みが混合し、行動に歯止めを効かせて

いる。

「君には濁りがある。不純な感情、傾いた天秤、錆びた分銅、君の裁きはいくつか問題があると思うの。妾は光となれなかった。4区はなぜ消滅しかかっているのか明細な原因はわかっていないけれども……本当にわからないと言うのが正直な感想だ」

「自然的原因では無いと言いたいのか？」

4区はHerzの方を向くと、頷いた。机をなぞりながら彼女は暗殺者の方へと向かう。

「妾たちは色々なことを体験した。ともに悲しみ、楽しみ、もしくは裏切りあったのかもしれない。それが君の人生でもあり、妾の人生でしょう。星が潰えるのも、幸福が潰えるのも」

4区はHerzの眼前に迫った。右目の眼帯を興味深そうに見つめるが、対して一步も動かず、表情も変えない。

「私が間違っわけがない。1区は間違えない。王は間違えない」

「今更忠誠心を並べたって何の威圧にもならないよ。Herz」

ペデエンスは両手でギヤドペカドルの頬に触れた。剣は今すぐにも彼女を切り裂けるようになっていく。

「……惜しいね。妾だって、区長でもないのに生き残って、ここに籠ってね」

4区はギヤドペカドルの眼帯を捲った。そこには確実に

ギヤドペカドルは剣で彼女の左腕を斬ると、肩に銃弾を放つ。ペデエンスは机の上に押し出され、傷口を抑える。彼女は半分起き上がった。Herzは明らかに動揺を示し、右目の眼帯に触れる。冷や汗が彼女の頬を滑り落ちた。

「随分と、似ているわね。仕方ない。それも運命だから。ギヤドペカドル……いい名前ね」

机から粉が出てきて、それらが再び石となるとペデエンスの背後には十字架が現れた。Herzはそれに見覚えがあり、状況を整理できなくて混乱したままであった。

「君の親戚は1区によって死んだ。親戚が1区の秘密を守ろうとしたから。それを弔いに妾が来た時、偶然帰ってきたのが君。十字架は決

して死んだことを決めつけるわけではない。そこだけは理解してほしかった」

「何故今更そんな事を言う…。」

彼女は現実から逃げていた事を知った。誰かに罪をなすりつければ自分のせいでも無いと自覚できる。誰かに罪というスポットライトを当てれば自分が脇役で済んでおわる。星のように。正しくない星のように。

「自分の行いを悔いることはない。Herz。君は未来にとって有益な事をしたんだ。世界から消えるのは妾であつて君ではない。君は妾より価値がある。より生きる指針がある。『努力、人が人であること。人が何によつて人であり続けられるのかを忘れないこと』。君は妾を犠牲に平和を作った。それでいいんだ」

傷口からの血は机から垂れ、血をつけたままの粉が十字架に使われる。彼女は正に4区の象徴で、今まさに終わろうとしている星だ。彼女の肌から粉が崩れ落ち始め、その粉はガラスを突き破り、あるべき場所に戻っていく。段々と現れるその顔は、とても穏やかだった。

「妾が死んだらそのままでもいい。妾は君の糧になる」

「待て!!!」

Herzはそう言うが、ペデエンスはどこからともなく取り出したナイフを掲げ、その顔のまま心臓に突き刺した。暗殺者の差し出した手を握る事なく、左手を高さに合わせて。囁くようにペデエンスは言った。

「これで最後だ」

手が落ちた瞬間、建物自体に大きく亀裂が入る。この建物自体がペデエンスのシンパシーによつて形成されたものだど気がつく頃には、既に崩壊寸前だった。真つ先に、大きな瓦礫はペデエンスに落ちる。ギヤドペカドルは割れて骨組みだけの壁から外に脱出した。彼女は上を向く。点滅するかなのような青い星が、静かに、消えたように見えた。

Emigreという本をSecretaryは持っている。しかし何故かその本のタイトルを誰も読めないし、1文字1文字が何という記号なのかすら理解はしていない。

彼女はそれについて幾度か考えてきていた。大体決まって散歩に出る。散歩といっても5区の大地に足を踏み入れるわけにもいかなから、物資伝達通路、所謂パイプラインを歩いて思索に耽る。鉄錆の匂いと反響する5区の音、もしくはうめき。人生に関する事をよく考える彼女にとっては良い場所だった。

しかし、出張で来た人と鉢合わせたみたいだった。グッドフェローズは硬直した。Secretaryは珍しいものを見つけたと思い、驚きで瞬きを繰り返した。

「貴女は誰かしら？」

苦笑混じりにシユカレは聞く。フェローは逃げようとも考えたが警戒されるのも良くないので大人しく会話に乗ることにした。

「え、えと... こちら辺を散歩していた人、です...」

「そう。なら、少し驚かせちゃったわね」

そう言いながらもSecretaryはこの侵入者がどのような人物かを見定めようとしていたが、グッドフェローズはヘイダルのバッジをあらかじめ外しておいていた。故に、バベルから見れば7区の人間としか思えないはずだ。

「でも、ここは既に秘匿されていたはずだけど...」

Secretaryは小声で何かを呟きながら目を逸らし、考え事をしている間、彼女は過去を見ていた。そこは消灯や点灯を繰り返す中で輸送車が稀に行き来している。つまりはこれは立派な組織であり、何かしら別の企業がこの組織に物資を輸送しているということだ。

フェローは目の前にいる敵に対して申し訳なきように言った。

「... どうかしました？」

「あついえ... 少し考え事を。つまり貴女は偶然ここに来たというこ

とかしら？宜しければ経緯をお聞きしたいのですが」

Secretaryは少し早口で言った。フェローはヘイダルのことを隠しながらここまでの経緯を話すのをどうすればいいのか、悩み続けていた。しかし、ある程度のシナリオが決まったので、話す。「ご存じ、私は7区の間人です。そして、ここを見つけたのは私が外縁に沿って散歩をしていた時です。古いレールを見つけたんですね。こんなところでこれを見つければ珍しい。私はそのレールを追うことにしました。そこで行き着いた先がここでした」

Secretaryはその言葉を1語も間違えずに転写した。何度か頷くと、彼女は言った。

「わかりましたわ。貴女の話は理解しましたし、今後に活かすことにします」

言い終わるなり、通路の灯が消えた。完全に真っ暗な中、フェローに聞こえたのは数個の足音だけだった。グッドフェローズが状況を理解した時には既にバベルはすぐそこに迫っていて、彼女の脇腹に重い1撃が加えられた。

がつくりと、ヘイダルは脱力し、冷たい床に臥した。Secretaryは電話を取り出し、本部と連絡を取る。通路の灯がまた点いた。

「…ええ、回収と、あと、チャフに見直しを要請しておいてもらえないか。あまりこんなことしたくないの」

薄ら意識の中、ヘイダルは状況を整理していた。しかしそこに一つの声が聞こえる。

「シユカレさん？」

Secretaryは振り返る。その表情や目がいつもと違い笑っていないことにAugeは少し狼狽えた。

「どうかしましたか？」

「忙しいなら後でいいんだけど、少し話したいことがあって」

Augeはもたもたしながら答えた。Secretaryは気持ちを切り替えるために深呼吸をひとつして、フェローから離れた。本部からは今数人の作業員が項垂れた彼女を運び込もうと動いている

ところだ。

フェローは目を開け、Secretaryの奥にいるAugeを見た。彼女の中で既視感が芽生え、それはなんとも言い難い感情を生んだ。

「ギヤドペカドル…？」

「えっ」

Secretaryは直ぐに振り返ったが、Augeは素つ頓狂な驚いた声を上げた。グッドフェローズは脇腹を抑え、浅い呼吸をしながら立ち上がり、言う。防弾の為に来た衝撃吸収用のクッションが彼女の意識を保ってくれていた。

「ギヤドペカドル。ギヤドペカドルだよ… 知っているでしょ？君の大切な親戚」

Secretaryは両者に代わる代わる視線を送った。グッドフェローズは笑顔を取り戻し、サングラスを地面から拾い上げ、胸ポケットに差した。反面、Augeは当惑するばかりであった。グッドフェローズが手摺に腰掛けたタイミングで彼女は言った。

「知り合いなのかしら？」

「… 多分、僕の親戚の知り合い。僕とは直接会ったことがないだろうけど」

「だいぶ呼吸も落ち着いてきたのか、良き同輩はAugeに手招きする。」

「君を待っている人がいる。ここがどんな組織かは分からないけれど、こつちに来ない？多分、もつといい場所が君を待っている。安らかに君は生きることが出来る」

Augeが一步進んだところでバベルは彼女を引き留めた。

「… 貴女がどんな人間で、彼女とどんな関係にあるのかはわからなければ、私にはこの子を渡せない理由があるの。だから、諦めてもらえると助かるのだけど」

「あつ、シユカレ… 私の伝えたいことは、これと似たようなものの」

Augeはもう一步踏み出した。グッドフェローズの口元が緩み、

笑顔が彼女を迎える。パイプラインの奥の奥から足音が聞こえてくる。

「僕をここから出して。Secretary。さよならをさせて」

Secretaryは啞然とし、もはや追い止める気にもなれなかった。ただ失望と自責があり、呆然としていただけだった。グッドフェローズはAugeを招き、遅い足取りで出口へと向かっていった。後から来た作業班は未だ固まったままのSecretaryを見て、困惑しただろう。

Emigreという言葉に、彼女は当初、既視感はなかった。しかし、Augeの放ったSecretaryという言葉。それは大いに、大いに既視感があった。以前はそれで呼ばれていたのかわような、そんな既視感。Schelber地区、Frankran地区、Stokehole地区。隕石によって溶かされた…。いや、今はそれではない。

もしかしたら、自分の今話している言葉とは、数年前、自分の知っていた言語とはかけ離れているのかもしれない。すべてが置換されたのかもしれない。考えすぎなのか？いや、その可能性も一応はある。

バベルは一つの可能性に気付いた。もし、言語が全て置き換えられたのだとすれば。しかしそれをしたところで何の意味がある？なんだ。やっぱり考えすぎか。

グッドフェローズはAugeの回収という思わぬ成果を誇っていた。当のAugeは自分の置かれている状況や、その、変にスキップ気味の侵入者に対して不信感を抱くばかりだった。

「僕はどこに連れて行かれるの？」

ハイダルはそれに直ぐに答えることはできなかった。チーフやモラルと合流できなければ永遠に5区に閉じ込められたままだからだ。フェローはカバンから飴を取り出し、Augeに渡した。そしてサングラスをかける。

「そうだねえ…。最終的には1区の、君の親戚に会うことになる。いやあ！彼女の親戚とかどんな堅物かと思ってたけど割とフランクで

助かったよ」

釋は長く続く。それを嫌がるフェローは反面教師として多くは語らなかつた。A u g eの親戚がヘイダルという組織にいること。そして自分もその構成員だということ。

グッドフェローズは携帯で一つの連絡を受け取った。それにはこう書いてある。

「ギヤドペカドルが5区に向かったらしい。もしかしたら個人作戦かもしれないため、避難はしておいた方がいい」

彼女はA u g eに何かを尋ねることは控えていた。それよりも腹部が痛い。しかし、聞かずにいられなくなり、ついにはこう言った。

「なんか… 君、親戚に手を焼かされることない？」

3区の傭兵。Guardianはその話を、シャルル・デヴオンに話していた。発端は「今まで何をしていたのか」とシャルルが尋ねたからで、その頃には既に外は明るく、紅茶は冷めきっていた。隙間風が足を伝うが、それが逆にGuardianの記憶と合致していた。「あそこはダメな場所だよ。シャルル、私はあそこにいたけど、今まで見てきた中で特に酷かったと思う」

「どんなところが？」

その質問に対して彼女はどの点をあげようか悩んでいたが、まず、大っぴらな部分から話した。

「3区の政策にはゴドウィンっていう民間の軍事会社がこびりついている。だから3区は軍事担当みたいな扱いになった。政策を操るのはその組織のトップだけど、己の権威のために何にでもするような人で、みんなは苦しんでる」

「…そう。確かに3区の傭兵っていうのは精鋭だって聞くけど、その分苦しんでいる人もいるわよね」

Guardianは頷いた。

「今は私のいれる場所があるからいいけれど、私が3区で傭兵として雇われたのは親がいなくなったからなの。親は私がもつと幼い時に宝石屋をやった。1区から取り寄せたり、6区の質屋から買ったり、とにかくいろいろな手段で。そこでのクレーマーと小競り合いになつて、マガジン格納部で殴られてそのまま。」

シャルルはGuardianの身を案じていたのは元々だったが、ノイズによる精神汚染の他、彼女は少し問題のあるように思えた。普通、自分の両親が亡くなったことを初対面で、しかも何も隠さず無感情に言えるものだろうか。

Guardianは喋り続けた。

「3区は孤児を喜んで迎え入れる制度があるっていうのは知ってる？ 孤児院に引き取られて寛大な祝福を賜る…いや、こんな言い方じゃなかったかも。ともかく、あれは嘘っていうか、ゴドウィンの策略に

近い。徴兵は反発される可能性が高いから孤児から引き取り、傭兵に仕立て上げる。凶器や犯罪の取り締まりが緩いのもそれを進めるためだと思う」

「待って？3区ってそんなにヤバイ場所なの!?」

机から身を乗り出し、こんなことを言いながらも半分寝ているようなGuardianの耳に響く声をシャルルは上げた。彼女の中で綺麗な世界、つまりは復興可能な社会の尺図が段々崩れていく。

「…つまり3区は罪のない孤児を作りやすい環境に放置してそれを傭兵にしてるってこと!?!」

「え、うん。そうだけど」

シャルルは捲し立てるように言った。

「それって規律に反してないの?『区民の生活は最低限保障される』って!」

「落ち着いてシャルル。もうみんな起きてる頃だよ。石が飛んでくるかもしれないから静かに」

… 1区のお嬢様は座り直した。そして深く息を吐き、4杯目の紅茶を飲む。

「それで、結論から言えば規律には反してない。ちゃんと保証は存在するし、孤児院を増やすっていう政策はそれに当てはまるし、私の親もそうだけど孤児になっちゃうのって大抵小競り合いが原因だから。つまり、区は規律は守ってるんだよ。ずっと無差別殺戮が繰り返されてるわけでもないし」

「…そうよね。規律って区全体が守るべきだから、少し曖昧なものもし反していたりしたら通報されているはずだし」

Guardianは時計を見た。任務はとっくに終わっているのでもいつでも帰ってよかった。しかし本部からは連絡がないし、グダグダ居座っていても別に問題もなかった。孤児傭兵は言った。

『この世界で珍しいのは、人を見る目がある人』だよ、シャルル。常に才がある人間は見つけられるわけじゃない。だから安全な場所から人をもらって、あとは審査をする。3区の”調整”は街に施されないうで、傭兵育成施設で行われる。みんな、それを見て育つ。施設を出

たら他の区の警備に行つて、次に護衛。その次は秘密任務。ここまで上り詰められる人も少ないの。空があるように見せて、それは天板だった」

「大変な思いをしたのね…。でも、それがあつて、今生きているのなら私はそれでいいと思うわ。ただちよつと…。こんなこと言うのは失礼かもしれないけれど、あなたはもつと世界を広げたほうがいいと思うの。話を聞く感じ3区に毒されているっていうか、そんな印象を受けるから」

Guardianは首を傾げた。それは愚弄でも何もなく、ただ純粹なる疑問だった。

「私は3区の間人だよ？」

その発言によつて固まつてしまつたシャルルを、Guardianは再度凝視した。

黒い箱を紙袋の中にしまい、手を振つて別れを表した。

「待って!!」

正気に戻つたシャルルがGuardianを引き留めたが、もう遅かつた。彼女の体は液状化し、既に彼女の視界には存在しなかつたからだ。

傭兵はシャルルの家の近くに再度現れた。液体であつた方が彼女は慣れていたが、いかんせん人に見られていいような物でもないの、それは最小限にとどめた。

途中、一つの殺気を伴つた足音が背後から聞こえてきた。Guardianはその今まで感じたことのないような殺気から、本能的に回避行動を取つた。目を開けたときに居たのは、彼女の想像通りの容貌。しかし攻撃はしてこなかつた。

「…驚かせてしまった様だな。謝罪する」

その人間は1区の目をしており、右目に眼帯をつけていた。Guardianは恐怖心からしばらく動けず、喋れもしなかつたが、その半人1区は聞いた。

「この辺りにCandleという宿が在る筈なのだが、地図が曖昧だな。道筋を示してくれないか」

3区の傭兵は指を差した。彼女はその方をまっすぐ見て、また向き直した。

「感謝する」

それだけいってハイダルはその方向に走り始めた。Guardianは深呼吸を数回繰り返すと、ようやく落ち着いたようで、行った先を確認する。既に姿は無い。

「…えっ…何だったの？」

力無くバベルは言った。

「今回で5回目ですか…。いやはや、特に忙しいのですな」

3区の老いぼれは言った。5区の秘書によって扉が開けられ、中に入るよう促される。

杖を使わず、しっかりとした足取りで彼は中に入る。そこは開けた景色の見える区長室だった。

「久しぶりだなあ！また面倒にならせてもらうよ」

区長は彼と握手をした。彼はソファに座り、机に置かれたコーヒーを啜る。

「この前は確か4区消滅に際して、でしたかな。ふふ、結局杞憂でしたかね」

「なに、警戒するに越したことはなからうて。いつ会議室を蹴破り、暗殺者が私を殺そうと発破をかけるか、気が気でなかったのぞな」

3区のいち傭兵は小さく笑った。

「寧ろ、身近に気を配った方が良いと思わざるを得まい。3区より優秀な軍事組織などありはしない故…。」

ゴドウインの將軍を退役し、隠居生活を送っていたのも束の間こんな護衛につくとは本人も思っただろう。しかも5回も。しかし結局、軍事力という面で見れば3区は圧倒的であり、その傭兵も誇りに思っている様だった。

「ジエヘナ様。これが今回の要項です」

秘書は傭兵に複数枚の紙を渡した。字を大きく配慮し、脚注を極力少なくした彼女なりの配慮を持っている。

「ほう…。身辺警護は予期していましたが、組織の監視もあるとなると骨が折れますな」

「ヘイダルという組織がちょうどあの爆発の外縁に研究施設を建てたいと数時間前に打診してきた。ただな、2枚目を見てくれ」

ジエヘナは2枚目を捲ると、最近行われた5区の”調整”の結果が出てきた。コードネームをクラシックとした容疑上スパイに関するものであった。

「奴らは研究所を建てたいのはまあそうだろうが、その跡地にある何かを探っている。私のその監視というのは、先生。あんたが行かなくても良い。代わりの誰かを送り込むだけで結構でな。結局、奴らのバッグには1区がいる。私はそう思っている」

「1区…ですか」

彼は1区に行った時の記憶を想起させていた。まるで白と黒の場所。人々は伯爵や侯爵によって支配され、鉋物を掘らされ続けた。彼らの富は肉と血の結晶である。「血塗れた金」「屍上区」。郊外に立てられた1区の看板に書いてあったのを、ジェヘナは思い出していた。

「なるほど。魔王様も大胆…まあ、私はその監視は他の者に任せます。最近良き新人が入ってきたのですよ」

秘書はソファの後ろを睨んだ。「彼女」と目が合い、彼女も視線を返す。しかし、区長はそれに気づいてなく、「そうかそうか」と言った。「ところで、將軍を退いてからもなぜ傭兵を続けているのかな？さらにはゴドウィンとも関係が続いている…。静かな生活を望んでいなかったんじゃないのか」

「…離れることは叶わなかった」

彼は重苦しく言った。それは上面でも何ともなく、本心からだった。

「ゴドウィンは政権に癒着している。私はただの老人に他ないが、彼らは、私をやめさせようとはしていない。私は1人の3区だ。傭兵だ。傭兵で在るが故に、3区で在ることに変わりはないのだ」

ジェヘナは書類をまとめポケットにしまった。区長と彼は立ち上がり、再度握手をした。

「では、よろしく頼むよ。將軍先生」

秘書が扉を開け、区長室を退出するとその中は2人だけになった。

「お待ち下さい」

秘書は肩を掴んだ。厳しい口調だった。

「貴女は5区の許可証を持っていらっしやいますか？」

少女は無言でポケットから無造作に取り出したそれは確かに許可

証だった。秘書はほうとため息を吐くと屈み、視線を合わせて言った。

「貴女はジエヘナ様のお連れと私は思っておりますが、すみません。あの人は貴女の事を知覚していないみたいで、私に何をしにきたのか教えてくださいませんか？」

「人探し。あのジジイはそれをさせてくれる」

言うなれば3区の大將軍、ジエヘナを「ジジイ」と一蹴する少女を秘書は幼さ故の無礼か、本当に無礼な奴か悩んだ。しかしその生意気そうで純粋な目からは悪意を感じ取れない。

「承知いたしました。しかし忘れなでください。貴女はいま5区に
いることを。5区にいる以上、5区からは逃れられないということ
を」

秘書は少女の頭を撫でた。半ば賭けだったが満更でもないわかって、同時にその少女が孤児だということも分かった。

「お前は何故オレが見える」

少女は言った。目隠しをしている少女は本来他の人に見えない筈だった。

「5区は私ですから」

「… お前から電話が来るなんて本当に久しいのではないか？」

相手口はそんな反応をする。しかし、私だつて驚いている。ここま
で他人に揺れ動かされることもそうそう無いだろうから。

「4区つて消滅したのか？」

早速質問を行う。相手側は何のことか、一瞬戸惑ったらしい。

「1454年10月4日。確かに4区は消滅した。2, 3区の合同警
備チームが配置されていたにもかかわらず最後の4区であるユイ・ペ
デエンスは警備諸共殺害されていた」

「そうだな。それに確かに間違いはないだろう。それに4区の事だし
移民も存在しない。では重ねて質問をしよう」

シユカレから報告があった。私の瑕疵によって保護されていたあ
の子が自主的にバベルをやめたと言うこと。しかし半ばあり得ない。
掘り進めて聞いていくと7区の間人間が誘って、そのまま連れて行つた
らしい。多分それは金枝… いや、ヘイダルの仕業だろう。

「ギヤドペカドルつて知っているか？」

「… ああ。よく知っているし、幾らか話したことすらある。しかし
それが今、何の関係があるんだ？」

私は単刀直入に聞いた。

「奴は1区か？4区か？」

建物の軋む音が嫌に大きく聞こえる。彼女の電話には続きがあつ
た。「彼女は一体何者なのか」を、私は真に知らない。ペデエンスが私
に送ってきた手紙には「混血を嫌う4区」というタイトルの本の1部
分が載せられていた。

4区は混血を嫌う。彼らの内を巡る血液に他が混じるのを嫌う。

4区は混血を嫌う。彼らを取り巻く環境に他が混じるのを嫌う。

続く言葉には、秘匿された4区について。それらは4区を作れない
が、確実に4区であると彼女は綴っていた。しかしそれは誰なのか。

「1区であり、4区だ」

魔王は言った。

「彼女、彼女らに罪は無い。しかし4区はそれを遠のけ、1区はそれを秘密とした。これは17年以上も前の話だ」

「続けてくれ」

「17年も前であれば私が1区に居た頃だろうか。いや、ペルセフォネが生まれてから案外経っている。であれば私は既に7区にいたのだろうか。」

「後の、纏められた記録で学んだ事だ。彼女らがまだ5歳の時、1区と4区は秘密裏に会議を行った。結果としては彼女らの出身地を『未公表』として4区から除外することと1区が全ての責任を負うこと、世間には公表しないことが約束された。その時問題となったのは彼女らの親族であり、血筋だった」

「何か問題があったのか?」

「仮定ヘイダルはギャドペカドルとあの子の間を「親戚」と称していたらしい。やはり4区は変わらないのか。血筋争いが何代も続いたり、血に塗れることを幸と見做す族がいたり、精巧な街の中にあれほどの狂気が潜んでいるとは思っていなかった。」

「記録上最も長い家系図を持ち、その分プライドも高かった。つまりは彼女らの存在を知ったらどうなるか。後先考えず大規模に動き、世間にそのハーフという存在が知れ渡るかもしれない。結果的に彼らは消えた」

「4区に”調整”は存在したのか?」

「4区にはその血筋争いによって純粋な血族が生まれるという思想が根底にある。つまりは調整は必要ないのだ。実際調整の案件も聞いたことはない。」

「...それは今関係ない。エリス、ギャドペカドルは2日前に5区へ行った」

「何?」

「微かに鼓動が速くなるのを感じる。」

「お前の電話で薄々勘付いていた。バベルという組織にギャドペカドルは行ったのだろうか。そしてそこで唯一の親戚と再会を果たす。バベルというの組織はヘイダルの裏の部分を暴こうと活動している。」

第一、第二薄明程度の規模で。ギヤドペカドルは何十回も同じような組織を見てきたはずだ。親戚のいない反逆組織は既に彼女にとって価値の無いものになる」

「… またお前は私から奪っていくのか。ペルセフォネ。それも1区の為か？」

私は言葉が続ける。

「いいか、妹。お前は光の齎す影を知っているか。影の齎す争いを知っているか。ギヤドペカドルはつまりこれから再会相手の仲間を始末することになる。1区だって、お前の齎す光の影で革命が起こっている。だからお前は根絶することができないんだ」

「理解している。だからこそ障害を全て薙ぎ払うのが私の使命だ」

確固たる意志を魔王は持っている。だからこそ私が何を言ったって無駄なはずだ。しかし、何ともやるせ無い気持ちになってしまう。

「ギヤドペカドルは辛い選択を責められるだろう。私は少ししたらそのバベルとやらに外向こうと思う。お前も来たらどうだ」

私は沈黙した。既に変更ってしまったもの。そう思っているてもその面影と今を重ねて対比することは多い。

我を通す為に、それは1区の繁栄という建前の元に、奴は動いている。魔王とは、そういうものなのだろうか。

「…… 私が1区を出てから1年が経った時、来客があった。暖かい陽気で、そろそろ葉物の収穫の時期かと思っていた時、来客があった。それは1区の公務バッジを付けていたから私への伝言かと思ひ扉を開けた」

「…」

昔話を続ける。右腕をさするとパサパサと粉が落ちるような音がするが辛うじて形を保っていた。

「その1区は私に襲いかかった。何故だか理解できないままに私の右腕に刃物が刺され、私は防御として彼らを殺してしまおうとシンパシーを使おうと構えた。その時静止を掛けたのはお前だったよな、ペルセフォネ。そして私の右腕を焼いたのも、お前だ。」

お前は私が痛みで気絶していると思ひ、下手な治療を施した。腕の

黒さは治らず、切り落としてしまおうかと悩んでいる間でもお前はその訪問者を擁護していた。一生懸命にな。私はその時点で愛想が尽きた。その下手な治療のせいで私のシンパシーは腕が無くなる直前でしか戻せなくなった。これはお前のせいだ。

お前はさっさとその場を去ったな。私はよろめきながらも立ち上がった。私は今でもあの時の姿のままだ」

長い沈黙が続いた。ペルセフォネの失敗は数少ないが、それ故に精神的負荷は大きい。私はその沈黙を破る。

「お前はそれと同じような影をギヤドペカドルに施すつもりか。既に言葉はギヤドペカドルには届かない。お前は過去のお前を見るんだ。魔王の片鱗を見せたあの時のお前だ！」

「……止める。と、お前は言いたいんだな？」

魔王はため息をついた。

「無理だ」

「何故、無理なんだ。お前に忠誠を誓った戦士がお前の言うことを聞かないわけがないだろう」

実際、7区にいる私より1区の、しかも区長である魔王が現状をよく知っている。故に私はその言葉を信じる他なかった。

「ヘイダルの異端者と3区の元将軍がコンタクトを取った。どう動くのかにもよるが、他区が関わっている以上、私の権力は及びづらい」

「シルヴェット・ノズワージー。では特別認可を取り下げると言うことで宜しいのですか」

ユイ・ペデエンスはガラスを隔てた奥の人物に言った。彼は全身粉だらけで、真剣な顔をしているペデエンスを虚に見つめている。

「かまわない、かまわないさ。僕の芸術が広く知られるのならそれでいい」

ペデエンスはその、目の前にいる偉人に言葉を返した。

「あなたの芸術が他者に渡り、『巧匠』の権威が建てる家を買えるほどの金が盗人に渡っても、そう言えるのですか。あなたは自分の作品を何か勘違いしているのかもしれない」

「いいや、勘違いなんてしていないさ。みんな、僕の作品を気に入ってくれているからね。それに付け加えらね、僕は別に金にこだわっているわけではないんだ」

シルヴェット・ノズワージーは足を組み直した。鼻で笑っているようにも、区長代理を解き下すようにも見える。いずれにせよ、迫力があつた。

「代理様は自分の利益のために働くか、4区のために働くか、自らの口で述べたとしても民にとって信じてもらえるかはまちまちだろう。だから働いてみせる。それが4区のためであつたら民は納得する。」

それと同じですよ。僕は僕の利益のために絵を描いてるんじゃない。ずっと前から目標があつて、その手順の一つが、僕の芸術を広げることだつたんだ」

ユイ・ペデエンスは看守に目をやると、看守は即座に彼のテーブルから書類をひったくり、ペデエンスに戻した。

「正直、あなたが何故刑務所にいるのか、私には理解できません。あなたの罪状は特に荒唐無稽だと思うのですが」

「彼らが言うのならばそうなのでしょう。僕は別に自分の行いを常に信じているわけじゃないからね」

彼女は深く息をつくとき、前に置いたメモとペンを自分のポケットに

しまい、今までの高圧的な口調を少し改善させ、話し始めた。

「ここからは区長代理としてではなく、評論家の立場として話します。あなたの芸術は間違はなく4区に新たな風を巻き起こし、それは以降100年は安泰でしょう。あなたの芸術はあのバシリカを越すものになるでしょうし、芸術規格の候補にも上がるはずですよ」

芸術家は数度頷いた。看守も同意を示しているように頷いた。

「あなたは4区をどうするおつもりですか？」

瞬間、動きが止まった。彼の震える手は止まり、看守の笑顔は強張る。秒針の音が響く、彼は言った。

「別に」

十数秒間彼女は見つめ合った。目をじっと睨み、その奥を見透かしていた。彼女は立ち上がり、綺麗に回れ右をして、いつもの口調で言った。

「… 良いでしょう。退出します。手続きを」

彼女が出てった後、看守がつぶやく。

「何がしたかったんだ？」

「知らん。もしかしたら吸収しようとしたんじゃないの」

彼も立ち上がり、ポケットに石用ペンがあることを確認し、看守の開けた扉の先へ行く。独り言のように彼は呟いた。

「僕はただ芸術を限定させたく無いだけなんだけどな」

2年後に、彼は最後の芸術を残して獄中死をした。彼の最後の芸術というのは「シルヴェット」という名前で、柱を削ってできた彫刻だった。25歳、4区に衝撃が走ったのは事実だ。

そんな喪中、ユイ・ペデエンスは私的に、ある資料を請求した。内容は彼の親族関係、つまりは血族の追求で、それらの遡及員は毒付いていたし、難航した。ただ、手元に届いた資料というのはそれに見合う価値があった。

「見つけましたよお、彼の親族たちい。大変だったんですからねえ、ほんと〜」

「角ばった雰囲気は嫌だ」と担当された遡及員の1人、ケフエイドは悪態をついた。

「僕のシンパシーを過信しすぎじゃないの？もうさあほんとにい……」

ユイ・ペデエンスは彼を無視して資料を読み漁っている。ケフエイドもじきにだまり、机に身を乗り出し、まな板の魚みたいになっているまま読み終わるのを待っていた。

「彼は自分の芸術に関して無関心だった。自身の広げればそれで良いと言っていた。投獄されてからはどのような動きがあった？」

「彼のファンである看守が労働の功績とか言って石用のペンを渡したんだって。それによって芸術の道が続いた。まあ、普通ダメなんだけどさ」

ケフエイドは魚の真似をやめ、きちんと向き合った。彼女は刑務所内での彼の佇まいを思い出していた。全てを知っているようで、格式高い、どこか人に対して諦めを持っているような目。彼の眼球は既にペンと壁の粉末のせいではほとんど見えなくなっていた。

「その時の看守が刑務所を新たに作ってしまったてここを彼の自展会場にしようとか言ってるけど、まあ無理だろうね。あとは……何かある？」

作品としての「シルヴェット」をペデエンスは見た。しかしそれは彼自身を表しているようには到底見えなかった。「自画像」という人も中にはいたが。彼女はつぶやく。

『『シルヴェット』とは、誰だ？』

遡及員は人差し指を口に当てる。目で合図を送ると、「仕方ない」と言った顔をし、ペデエンスはシンパシーを使つて店内の鐘を3回鳴らす。

「ありがと。この合図まだ通じるんだね」

「この喫茶店はシルヴェットの建築様式が採用されている。彼の作品を一度でも見たことがあるならそれは理解できるだろう」

店内には2人しかない。その2人は話を始めた。

「あなたがそれを知るには彼の親族を見なきゃいけないね」

彼の目線を察し、区長代理は秘密と書かれていない方の資料を開いた。そこには彼の親族に関するもので、遡及されるうちに大きく見開

いて、ため息をついた。

「彼の親の親の親は『巧匠』の立役者のバシリカだつてさ。ホント数奇な運命」

「…バシリカ含め、苗字はアプスだつたはずだが」

彼は小さく息をつき、注文したクツキーを二つ同時に食べた。

「シルヴェット・ノズワーシーはアプス家から8歳2ヶ月の時点で追放されているよ。そこから2人、少女と父親がわりの爺さんに会つて、14歳の時に投獄されたんだつてさ」

「追放、か。4区規律上、血縁者と関係を断つのは不可能だつたはずだが、まあなんとでも抜け道はあるだろうな」

ケフェイドは気まずい顔をした。4区を良くするために働いているのだからこういう話は本来聞きたく無いだろうと思つたのだが、こちらもまた仕事だと割り切らなければならぬ。

「少女の名前はシルヴェット、爺さんはノズワーシーだつてさ。少女は彼に絵の具と筆を、爺さんはキャンバスとかの道具を与えた。最後の作品の『シルヴェット』は多分そこからじゃ無いかな」

「コンタクトを取つたのか?」

迦及員は頷いた。

「シルヴェットさんには会えたよ。ノズワーシーさんは、亡くなつちやつたつてさ。だからあんま詳しくは聞かなかつただけけど、話だけ聞いてトンスラしてきた」

「なるほど。シルヴェットの柱の下に少しだけ掘つた跡があるつていうことは、まあ察しはつく」

壁にかけられた彼の組み立てた「思考」という芸術とそれに似た建築様式。「思考の表現」とされた「巧匠」の緻密で無感情な組み合わせと全く反対。ペデエンズは言った。

「彼は復讐をしたのか?」

ケフェイドは腕を組み悩む。そして「わからない」ジェスチャーをしてみせた。

『巧匠』の連中は彼の芸術をずっと批判していた。それが災いして今や建築技術以外で彼らについてくるものはいなくなつたが、それも一

度は突き放した相手だからか」

4区の血族を重んじる考え方と並行して頑固でもあったから、一度見做したものはもう変えない。まさか頓珍漢だと思つた芸術がその本人の手によつて大成されたのだからアプス家は焦つただろう。

「復讐にしてはオープンだったけどね。芸術を良い時間の使い所にしてくれみたいな感じだったから、大衆に芸術を広めたかつたんじゃ無いのかなとも思うけど」

「どう足掻いてもアプス家は失脚したな。これからは『思考』が4区を彩るだろう」

そう言い終わった時、外から一枚の紙が放り込まれる。くしゃくしゃになったそれを戻すと、新聞のようだった。

「快拳、シルヴェット・ノズワーシーが『巧匠』の影響元、『アルカイク』確立者以来の4区芸術規格『傑作』を授与される…」

2人は黙り込んだ。外から群衆の大声が響く。

「シルヴェット万歳！芸術万歳！」

アン・チェム・ファームの判断試料

— 治安 — 最も発展した技術 — 最も力を持つ組織 — 他区民の受け入れ — 最も読まれる物 — 裁判制

1区：5位 冶金・鉱石学 金枝 審査が必要
地統譚 1 審制

2区：1 医学・薬学 信用銀行 受け入れる
学識書 3

3区：7 軍事・重機学 ゴドウイン 職に就けない
神書 6

4区：4 芸術・建築学 ログス家 受け入れない
藝術とは何ぞ也 多審制

5区：6 精神学 鉄杭 条件付き
仕事マニユアル 2

6区：3 通信学 三守団 受け入れる
冒険家備忘録 3

7区：2 自然論学 受け入れる
1区の新聞

=====
=====
=====
=====

— 法の整備 — 刑罰 — 自由度 — 頭脳 — 生活環境 — 情勢 — 有力資金
収入源 — 有力出資先

1区：完全 嚴重 5位 2位 良好 動揺 鉱石

2区：完全 寛容 2 1 絶好 安定 研究成果

開発 3区：不完全 嚴重 4 4 劣悪 動揺 傭兵・兵器

器 4区：不完全 嚴重 6 3 悪い 安定 建築

建築

	5区：不完全	嚴重	7	6	劣悪	安定	特別認可
使用料	輸入						
	6区：完全	寛容	3	5	普通	安定	配達・通
信							
	7区：完全		1	7	悪い	安定	農作物
技術							

治安：

この場所が人間にとって有害であるか、そうで無いかを判断します。治安はそこに住むにあたって重要な判断材料ではあるものの、暮らしやすいかどうかを確定するものではありません。

最も発展した技術：

つまりは、その場所が何によって繁栄したかを表しています。それは現代の技術体制にも影響するでしょうし、仕事にも関わってくるでしょう。

最も力を持つ組織：

その場所によどのような系統の組織が力を持つかによって、政治体制の偏りを判断することができます。一般的に、調整やそれに類似する組織であった場合は縛られた生活を送ることになると予想されます。

他区民の受け入れ：

その場所が別の人種をどう思っているかを示しています。確かに考え方は多種多様です。しかし彼らにとってはあなたは一体の動物なのかもしれません。

最も読まれるもの：

その場所に住む人間がどのような常識を持っているかについてです。その本の内容が彼らの常識の根底にあると考えると良いでしょう。

裁判制度：

罪人に対してどのような意識を持っているかの他に、罪をどれだけ厳正に扱うかを示し、また、政治形態の参考にもなります。

法の整備：

どれだけ統治する側がその場所を大事に思っているかがわかりま

す。できることなら整備の済んでいない場所には行かない方がいいでしょう。

刑罰：

罪人に対する意識や、人間性が厳しいものであるかどうかを表しています。

自由度：

その場所がいかに行動を許しているかを表しています。法律を考え、自由を放任しているか、容認しているかを考えるのも重要です。その場所で何がしたいかによっても変わってくるでしょう。

頭脳：

教育体制や、教育への自由、その場所の財政状況など、多種多様な面を見ることができません。自由度が低く、頭脳も低ければ、その場所の財政は非常に切羽詰まっていると考えるのが自然です。

生活環境：

あなたがもしその場所に行くとして、医療機関、伝染病予防、治安などを鑑みるでしょう。その大部分は生活環境によるもので、もし適当な場所があったとしてもすぐに決めるべきではありません。

情勢：

その場所で革命やストライキ、政治の新体制への移転など、現段階でどのようなことが行われているかが不透明ながら、行くべきではありません。

有力資金収入源：

その場所が何によって発展を続けられているかを表しています。前述の発展した技術と同じ系統であれば、それで政治が安定しているということも示しています。

有力出資先：

有力資金収入源とほとんど同じですが、その場所が今後、どのように動いていくかが書かれています。